

日本古代『論語義疏』受容史初探

高田宗平

The History of Acceptance “Lunyu-yishu” in Ancient Japan

TAKADA Sohei

はじめに

- ① 日本古代中世の『論語義疏』に関する研究の現状と課題
- ② 日本古代典籍に見る『論語』注釈書受容の実相
- ③ 日本古代に於ける『論語義疏』受容の諸相
むすびに

【論文要旨】

日本古代の『論語』注釈書の受容について、日本史学では『論語集解』のそれに関して研究が見られるものの、『論語義疏』については等閑に付されてきた。このことに鑑み、『論語義疏』を引用する日本古代典籍の性格、成立時期、撰者周辺の人的関係を追究すること、古代の蔵書目録から『論語義疏』を搜索すること、古代の古記録から『論語義疏』受容の事跡を渉猟すること、等から、日本古代の『論語義疏』受容の諸相とその変遷を検討した。

『論語義疏』は、天平一〇年（七三八）頃には既に、日本に伝来しており、奈良・平安時代を通じて、親王・公卿・中下級貴族・官人・釈家に受容され、浸透していた。八～九世紀では「古記」・「釈」・「讀」の撰者である明法官人によって律令解釈に、一〇世紀末～一一世紀初頭に於いては皇胤である具平親王が『止観輔行伝弘決』所引外典の講究のために、更に、一一世紀前半では明法博士惟宗允亮が朝儀・吏務の

先例を明らかにするために、右大臣藤原実資が有職故実の理解のために、それぞれ『論語義疏』を利用していった。また、釈家では、九世紀で空海、一〇世紀で法相宗興・福寺の中算が『論語義疏』を利用していったが、一一世紀後半に至ると、仏典を始め多様な日本古典籍に『論語義疏』が利用された。そして、一二世紀前半では、左大臣藤原頼長が幾多の漢籍を講読したが、その一つとして『論語義疏』を講読していた。就中、具平親王の周辺や藤原頼長の周辺に、文才に長けた公卿並びに中下級の貴族や官人である文人・学者が集まり、両者はともにそれぞれの時期の論壇の中心となつて、漢籍・漢学の講究・談義が行われた。そこに於いて、講読されていたものの一つが『論語義疏』である。

【キーワード】『論語義疏』、日本古代典籍所引『論語義疏』、具平親王、藤原頼長、漢籍・漢学の講究・談義

はじめに

日本は、古くから中国文化の影響を受けてきた。漢字・漢籍、また、それらを媒介として、漢学・律令法・仏教等多くの知的体系を受容してきたことは周知の事実であり、これについては多言を要するまでもない。従って、日本古代の知的体系の一斑を解明するためには、漢籍の研究が必要不可欠と言える。

日本に伝来したさまざまな漢籍のうち、『論語』は、正倉院文書にその名が見え、また、木簡に習書が見える等、古くから広く講読され、日本文化に浸透していったものであることは首肯されよう。

ただし、『論語』は、経文のみの単独の成書としてではなく、注釈を伴った書として伝来したものと考えられる。従って、日本古代に於ける『論語』の受容とは、厳密には『論語』注釈書の受容と言うべきである。

日本古代の『論語』注釈書の受容について、歴史学の分野では、三国魏の何晏（一九〇～二四九）の『論語集解』の受容に関しては考察が加えられているものの、後述する如く、『論語集解』とともに広範に利用されていた六朝梁の皇侃（四八八～五四五）により撰せられた『論語義疏』については等閑に付されてきた。従って、本稿では、日本古代に於ける『論語義疏』受容の諸相の一斑を明らかにすることを目的とする。

①日本古代中世の『論語義疏』に関する研究の現状と課題

第一項 受容研究

まず、日本中世に於ける儒教・儒学の受容の研究の嚆矢として、名を挙げるべきは、足利衍述氏⁽⁴⁾であろう。氏は、江戸時代の盛運を醸成した

のは朱子学の思想的背景によるものとの認識から、その起源を解明するため、鎌倉・室町時代の儒教・儒学、就中、朱子学を史的に考察した。主に、人物や家について立項し、列伝的な内容であるが、当該分野の先駆的研究と言えよう。序論中に「鎌倉時代以前に於ける我国儒教」と題して立項し、古代の通経の儒として清原頼業・藤原頼長・藤原通憲、等を指摘した。また、「経書講抄書目解題」に於いて、日本中世に邦人により撰せられた『論語』注釈書について、(一)本文は『論語集解』、ないしは『論語義疏』によるも、講義は新古両注の折衷であること、(二)講義の際に依拠した古注は、主として『論語集解』や『論語義疏』であって、時には北宋の邢昺『論語正義』も採用することがあること、(三)説くところは主に清原家の家説によること、(四)『論語総略』は鎌倉時代末期から南北朝時代の書写にかかることから、当時、既に古注と新注とを折衷する学風が始まっていたことを示す有力な資料であること、等を主張した。

日本古代に於ける漢籍・漢学受容の実態の解明に先鞭をつけたのは、内野熊一郎氏⁽⁵⁾である。氏は、漢学のうち経学に着目した。主として文飾された経書の句説の事例を日本古代典籍から搜索し、その典拠を検討し、日本古代に於ける経学の実態を究明した。その一斑として、『論語』注釈書の受容について、(一)奈良時代の論語学は『論語鄭玄注』、『論語集解』、『論語義疏』が行われていたこと、(二)平安時代初期の論語学に於いては『論語義疏』が確実に使用されたこと、等を明らかにした。

阿部隆一氏⁽⁶⁾は、書誌学・文献学の立場から、鎌倉時代末期から室町時代末期の『論語』、室町時代の『孟子』の各講究を、邦人により撰せられた『論語』と『孟子』の各注釈書の厳密な原本調査に基づいた検討によって解明した。『論語』の講究について、(一)おおそ、古注を主体としながら、時代が降るにつれて、新注に傾倒し、新注を採用することが多く、新古両注折衷となること、(二)清原家の抄物を見ると、単なる量

旧鈔本『論語義疏』の性格に論及した点は高く評価できる。

先の第一期と次の第二期の間に、阿部隆一氏⁽¹⁾による「金沢文庫蔵鎌倉鈔本周易注疏其他雜抄と老子述義の佚文」がある。『周易注疏其他雜抄』⁽¹²⁾は、東大寺凝然の高弟智照によって撰せられたもので、その内容は『華嚴演義鈔』に引く外典（漢籍）を抽出し、注釈を加えたものである。氏は、『周易注疏其他雜抄』所引『論語義疏』と、武内本及び諸旧鈔本『論語義疏』とを比較検討した。その結果、『周易注疏其他雜抄』所引『論語義疏』には武内本等に比して、誤脱が認められるものの、間々武内本等を校勘し得る所が認められ、皇侃疏校勘上、重要な資料であること、更には、鎌倉時代以前に溯及する日本古典籍に引く漢籍の文辞や、書人は漢籍校勘上、重要視すべきこと、を指摘した。

氏が、書誌学・文献学、とりわけ校勘学の見地から、日本古典籍所引『論語義疏』の性格や校勘資料としての貴重性を説いたことは、極めて重要な指摘である。

第二期の高橋均・山口謠司の両氏の研究について述べる。

当該時期は、高橋均氏⁽¹³⁾の一連の研究によって、『論語義疏』の文献学的研究が牽引され、前進した時期と言える。氏は一連の研究で、(一)旧鈔本『論語義疏』諸本全てに邢昺『論語正義』が竄入していること、並びに旧鈔本『論語義疏』に竄入した『論語正義』は旧鈔本『論語義疏』諸本間で殆ど異同が見られないことから、日本に於いて旧鈔本『論語義疏』に『論語正義』が竄入し、それが祖本となり、伝写されていったこと、(二)敦煌本『論語義疏』と旧鈔本『論語義疏』とは、先行するのは敦煌本『論語義疏』の形式のテキストであること、を明らかにし、また、(三)敦煌本『論語義疏』の形式を旧鈔本『論語義疏』の形式に改編した特定の編者が存在した可能性を推定した。更に、(四)武内氏が校勘する際に使用しなかった旧鈔本『論語義疏』や敦煌本『論語義疏』を資料に加え、校勘した。

とりわけ、氏が、日本古典籍所引『論語義疏』と旧鈔本『論語義疏』及び敦煌本『論語義疏』とを比較検討し、旧鈔本『論語義疏』が唐鈔本に由来する本文を有していることを、具体的に明らかにしたことは重要である。しかし、日本古代中世の『論語義疏』の実態を把握するには、使用した日本古典籍が『令集解』・『秘密曼荼羅十住心論』・『世俗諺文』・『論語総略』の四書では決して充分とは言いがたく、更に、『令集解』に新訂増補国史大系本を、『秘密曼荼羅十住心論』に日本思想大系『空海』所収本並びに『弘法大師 空海全集』本を用いており、テキストの選定に問題がある。

一方、山口謠司氏⁽¹⁴⁾は「『論語義疏』の系統に就いて」に於いて、『令集解』・『令義解』・『政事要略』・『性靈集略注』・『弘決外典鈔』・『世俗諺文』の各書に引用される『論語義疏』と、旧鈔本『論語義疏』を底本並びに対校本とする武内本、及び敦煌本『論語義疏』とを比較検討し、その結果を、(一)日本古典籍所引『論語義疏』と武内本では本文に少なからざる異同が見えるもの、(二)日本古典籍所引『論語義疏』には見えないが、武内本には見えない本文を持つもの、(三)日本古典籍所引『論語義疏』には見えないが、武内本には見えないものを、に三分類した。これらの異同を単純な誤写・衍字・脱字・脱文によるものではなく、武内本が日本古典籍所引『論語義疏』、敦煌本『論語義疏』と系統を異にすることに起因するものとし、長澤氏の説を承け、旧鈔本『論語義疏』は宋刊本に由来するテキストである可能性を主張した。

氏が、右に述べた(一)～(三)の字句の異同を、直ちに本文系統に関わるものと断じている点は、なお検討の余地がある。

また、氏が、『論語義疏』を引く日本古典籍として、『令集解』・『令義解』・『政事要略』・『性靈集略注』・『弘決外典鈔』・『世俗諺文』の六書を用いたことは高く評価すべきであるが、例えば、『令集解』・『令義解』・『政事要略』のテキストに新訂増補国史大系本を用いている等、テキス

的な新古両注の折衷ではなく、訓詁字義の点では古注を多く踏襲しても、義理の点は新注たる朱注に依拠することが多いこと、(三) 宋学は当初、禅僧により移入されたものの、清原家は経学に於いて、五山の叢林より宋学の享受が積極的であること、(四) 経書の講読について、ややもすれば五山の叢林は作詩作文の補助手段の傾向が見えるのに比べ、清原家は儒本来の態度に立とうとし、経書の学識理解の点に於いても、清原家は五山の叢林とは格段の差を示していること、等を解明し、中世の漢学の中心となったのは五山の叢林であり、宋学の摂取も五山の叢林が中心で、清原家は五山の叢林に先んじられた等、清原家の地位を低く評価する従来の説に対し、批判論駁した。更に、氏は、『論語義疏』について、「現本（現存旧鈔本―筆者注）が必しも侃（皇侃―筆者注）の旧形を悉く完備するに非ざることは明らかであるが、（邢昺正義の―筆者注）竄入の箇所を除けば、書写の体式を別としては殆ど旧形に近いと推定される。」とし、また、「皇疏が室町時代に根強い影響力を有したのは、皇疏自体の注解の態度目的内容が、我が室町期のそれに全く一致していたからである。皇疏は六朝時代の経師の諸説を集成し、それを講義風に平易に叙述し、独創的学術性を有するというよりは、啓蒙的な講義本である。その文体用語法等より考えて、皇疏は元来皇侃が行った講義の聞書筆録を整理して成ったものではあるまいかと筆者（阿部隆一氏―筆者注）は秘に推測している。即ち皇侃義疏はその性格上、六朝時代に於ける、言わば仮名抄に該当する。此が室町時代の仮名抄盛行期の趣向に合致したことは当然である。」と述べた。これは、『論語義疏』の原撰本復原や旧鈔本『論語義疏』の性格、旧鈔本『論語義疏』の伝本の多くが室町時代の書写にかかることの意味、等を検討する上で極めて重要な指摘である。

和島芳男氏は、歴史学の立場から、日本中世に於ける宋学受容を歴史的に解明した。その中で、『論語』注釈書の受容について、(一) 奈良時代の大学寮に於いては、『論語』注釈書として『論語鄭玄注』と『論語

集解』が用いられたこと、(二) 平安時代中期の官人層は、明経道に代わって紀伝道が栄えたことから、『五経正義』を知らず、『論語集解』を読まずとも、詔勅・宣命等の起草にあずかり、四六駢儷文等の技巧によって権門勢家の知遇を得て官途の昇進を期待するような状況で、経学の素養が不充分であったこと、(三) 藤原頼長は、『五経正義』や『論語義疏』を家司藤原成佐等と談義して習得し、養老学令所定のものより、新しい唐代正義の学を受容していたこと、(四) 花園天皇が『論語』談義を催すために、自ら『論語義疏』、北宋の邢昺『論語正義』、南宋の朱熹『論語集注』並びに『論語精義』、朱氏竹隠注等を抄出していたこと、(五) 鎌倉時代には朝儀が衰退し、明経家は本来の大学寮教官としての職能が狭められ、家学・家説の進講・伝授が主な活動になっており、醍醐寺三寶院所蔵『論語集解』及び大東急記念文庫所蔵『論語集解』の奥書・識語が示す如く、中原・清原両家が古注を相伝・伝授していたこと、(六) 明応八年（一四九九）に大内義興が正平版『論語集解』五冊を覆刻したこと、(七) 足利学校には七代座主九華によって書写された『論語集解』一冊・『同』五冊の二種が存し、一冊本は別筆にて皇侃・邢昺の疏、新注が書入れられており、九華以後も新古両注折衷の学風であったこと、等を明らかにした。氏の研究により、初めて『論語』注釈書の受容が歴史的視点に立って考察され、古記録や奥書・識語から『論語』注釈書受容の事実と受容層を明らかにしたことは高く評価できる。

しかし、氏の研究は、主に『論語集解』の受容についてであって、『論語義疏』について多くは述べていない。古代では『台記』、中世では『花園天皇宸記』の各事跡によって、『論語義疏』の受容を述べているが、この両古記録に現れる事跡のみが『論語義疏』受容の実相ではなく、その片鱗に過ぎない。また、氏は、古記録や奥書・識語を例証としているため、受容の事実を示すに止まり、実際に受容された『論語』注釈書の系統・性格を解明するまでに至っていない。

一方、近年、高橋智氏⁽⁸⁾は室町時代古鈔本『論語集解』の文献学的研究を行った。氏は、室町時代古鈔本『論語集解』の日本所在八四本、台湾所在一〇本を詳細に原本調査し、室町時代に於ける『論語集解』の流伝、系統を解明した。室町時代に於ける『論語集解』を、清家本系、正平版系、義疏竄入本系に大別し、特に義疏竄入本系は寺院系のテキストに多いことを明らかにした。更に、(一)室町時代中後期書写に係る旧鈔本『論語義疏』と、足利学校ないしはその周辺で書写された『論語集解』等の漢籍古鈔本とは書式や字様に於いて類似点が認められることから、旧鈔本『論語義疏』は足利学校を中心に発信されたもので、足利学校の学団や学僧が『論語集解』の転写を繰り返す過程で、『論語義疏』等を吸収し既存の『論語集解』のテキスト内に反映させて、義疏竄入本系が形成されていき、室町時代後半期にはこれが多く出現したこと、(二)古活字印刷の到来とともに、清家本を基に慶長刊本が刊行されたこと、(三)寺院系のテキストは近世に引き継がれることはなく、後の幕末の書誌学者や蔵書家がこれを見出すまで、世に現れることがなかったこと、等を明らかにした。氏の研究を、日本中世に於ける『論語義疏』受容の視点から見ると、『論語義疏』が足利学校を中心に発信されたこと、義疏竄入本系『論語集解』が寺院系のテキストに多いこと、を解明したことは重要である。

以上、日本古代中世の『論語義疏』に関する研究の現状と課題のうち、受容研究のそれについて述べてきた。『論語義疏』について、阿部氏による書誌学・文献学からの指摘が見られるものの、歴史学からの和島、書誌学・文献学からの高橋智の両氏の研究は『論語集解』が主であって、また、足利氏は中世の儒教・儒学史、内野氏は古代に於ける経学の受容研究、からの成果である。かかる研究状況から鑑みるに、右の諸論考が存する一方、『論語義疏』受容の変遷を跡づける研究は、未だ充分ではない状況と言える。

第二項 旧鈔本『論語義疏』の文献学的研究

近代に於ける旧鈔本『論語義疏』の文献学的研究の歴史は、主として、第一期 武内義雄・長澤規矩也、第二期 高橋均・山口謠司、第三期 影山輝國の諸氏に大別できる。

第一期の武内義雄・長澤規矩也の両氏の研究について述べる。

まず、武内氏⁽⁹⁾は、古典学の大前提となる本文の復原に取り組んだ。『論語義疏』(校本)・校勘記(以下、武内本と略称する)は、文明本(龍谷大学大宮図書館写字台文庫所蔵)を底本に選定し、宝徳本(石川文化事業財団お茶の水図書館成實堂文庫所蔵)以下、全一〇本を対校本として、旧鈔本『論語義疏』の本文を校勘・復原した。武内本が完成したことにより、旧鈔本『論語義疏』の文献学的研究は飛躍的に進展した。ただし、旧鈔本『論語義疏』の性格については究明していない。この他、武内氏の「梁皇侃論語義疏について」は、武内本に於いて校勘に用いた旧鈔本『論語義疏』諸本を解説するとともに、『論語義疏』の原形・来歴等を考察したものである。また、「論語皇疏校訂の一資料―国宝論語総略について―」及び「国宝論語総略について」は、『論語義疏』の原形を窺知せしめる資料として、曼殊院門跡寄託京都国立博物館保管『論語総略』を考察し、校勘資料としての有効性を説いたものである。

これに対して、長澤氏⁽¹⁰⁾は「論語義疏伝来に関する疑問」に於いて、旧鈔本『論語義疏』は唐鈔本に由来するテキストとする一般的な認識に対し、『經典釈文』所引皇侃疏が旧鈔本『論語義疏』と一致しないこと、台北国立故宫博物院所蔵盈進齋本以外の旧鈔本『論語義疏』は北宋の邢昺疏を含んでいること、皇侃疏の原形は單疏本形式と推測されるが、單疏本形式の鈔本が伝存していないこと、から宋刊本に由来するテキストの可能性を提起した。

長澤氏が、研究を行う上で無批判に資料を用いることに警鐘を鳴らし、

トの選定に問題がある。

第三期の影山輝國氏⁽¹⁵⁾は、武内本や高橋均氏による校本の不備を補訂する目的から研究を行い、現在も進行中である。氏は、「『論語義疏』校定本及校勘記―皇侃自序―及び「『論語義疏』校定本及校勘記―何晏集解序疏―」に於いて、台北国立故宮博物院所蔵本を含め、三六本の旧鈔本『論語義疏』の悉皆調査を行い、三六本の他、武内本及び根本武夷校正寛延三年（一七五〇）刊本の二本を含めて校勘を行った。氏の研究は、現時点での旧鈔本『論語義疏』の文献学的研究の到達点と言っても過言ではなからう。

なお、氏による「翻刻『論語義疏』（大槻本）―皇侃自序―並びに「翻刻『論語義疏』（大槻本）―何晏集解序疏―」は、旧鈔本『論語義疏』の悉皆調査の過程で得た成果を提出したもので、室町時代の積家に於ける『論語義疏』の解釈や外典解釈を窺う上で重要な資料となる。

また、右の影山氏及び洲脇武志氏・齋藤建太氏による「翻刻『論語義疏』（大槻本）―学而篇・為政篇―」⁽¹⁶⁾は影山氏の翻印の続編である。

他方、洲脇氏⁽¹⁷⁾は、「市島本『論語義疏』跋文について」に於いて、市島謙（一八二九―一八八四）の書写にかかる新潟県新発田市の市島酒造株式会社市島史料館所蔵『論語義疏』（以下、市島本と略称する）の跋文の翻字及び書き下しを行い、（一）狩谷掖齋湯島求古楼蔵本（以下、求古楼本と略称する）↓丹羽思亭本↓市島本、の如き書承関係、すなわち求古楼本は市島本の祖本と推定し、更に求古楼本は天正年間（一五七三―一五九二）に書写されたものであったこと、（二）慶應義塾図書館所蔵天文本は丹羽思亭の門人田山善甫によって発見され、当初は完本であったこと、（三）「求古楼^(本)は邢昺正義の竄入が無く、根本刊本序文に極めて類似した序文が備わっていた可能性がある」こと、を指摘した。

これまで、旧鈔本『論語義疏』の文献学的研究の現状と課題を述べてきたが、本稿に関わる特に重要な点を示すならば、以下の通りである。

『論語義疏』の本文復原は、武内氏が先鞭をつけ、その成果を高橋均・影山の両氏が批判的に継承したが、三氏に共通して言えるのは、何れも旧鈔本『論語義疏』相互の校勘であり、室町時代の時点での『論語義疏』の復原に止まっている。しかし、『論語義疏』は早く奈良時代より講読されていたのであり、従ってこのことを視野に入れた本文復原の試みが求められよう。なお、阿部氏が、鎌倉時代書写にかかる『周易注疏其他雜抄』所引『論語義疏』について、その性格並びに『論語義疏』の本文校勘資料としての有効性を唱えたことは、高く評価できる。

第三項 本稿の視角

以上、先行研究の現状と課題を述べてきたが、ここで先行研究の問題点を次にまとめると、

- ① 武内氏は、旧鈔本『論語義疏』の性格を解明せずに本文の校勘・復原作業を行ったこと
 - ② 旧鈔本『論語義疏』の性格について、長澤氏が宋刊本に由来する可能性を提起し、これを承けて山口氏が宋刊本説を主張するが、一方、高橋均氏は唐鈔本に由来することを主張し、宋刊本・唐鈔本の両説が併存すること
 - ③ 高橋均・山口の両氏が日本古典籍所引『論語義疏』を検討材料とする際の、日本古典籍のテキスト選定に問題があること
 - ④ 武内・高橋均・影山の三氏による旧鈔本『論語義疏』の校勘・復原は、室町時代の時点の校勘・復原に止まっていること
- の四点を指摘することができる。

これらの問題点を解決するには次の方法が考えられる。

- ① ②④については、日本古典籍に引く『論語義疏』を搜索し、その引用文と、旧鈔本『論語義疏』とを比較検討すること。
- ③については、無批判に活字本をテキストに用いず、良質な写本を

用いること。

以上の方法を用いることによって、日本古代に於ける『論語義疏』受容の実相が歴史的に解明されると思われるのであるが、歴史学の立場から日本漢籍史研究を行った太田鼎二郎氏は、漢籍史の研究を行うに当たって、「先づ、どのような・どの漢籍がいつごろ日本に伝来して我が国にたしかに存在し世に流布通行してゐたかを明確にして置くことこそ第一に必要である」と述べている。

右の太田氏の言に、筆者は独自に「誰（如何なる階層）が受容したか」を加えたい。これを本稿の課題である『論語義疏』に当てはめるならば、

- （一）『論語義疏』を含む如何なる『論語』注釈書が受容されたか
- （二）いつごろ日本に『論語義疏』が伝来したか
- （三）誰が『論語義疏』を受容したか、ないしは如何なる階層が受容したか
- （四）受容された『論語義疏』は如何なる性格であるか

となる。（一）～（四）を究明するには、〈A〉日本古代典籍から『論語義疏』の引用文辞を博搜し、その性格を解明すること、〈B〉『論語義疏』を引く古代典籍の性格、成立時期、及び撰者周辺の人的関係を追究すること、〈C〉古代の蔵書目録から『論語義疏』を搜索すること、〈D〉古代の古記録から『論語義疏』受容の事跡を渉猟すること、等が必要である。これらのうち、〈A〉については、旧稿⁽¹⁹⁾で明らかにしたので、本稿では〈B〉～〈D〉について考察し、日本古代に於ける『論語義疏』受容の諸相の解明を企図している。〈A〉～〈D〉を総合することにより、日本古代に於ける『論語義疏』受容の実相が歴史的に解明されるであろう。

②日本古代典籍に見る『論語』注釈書受容の実相

日本古代に於ける漢籍の受容並びに利用状況を考察する上で、漢籍の

学習についても知る必要がある。その手がかりとなる次の如き資料がある。

『養老令』には、経学を学ぶ上で使用すべき注釈書が規定されており、これを次に示すと、『令義解』卷三・学令第十一に、

凡教授正業、周易鄭玄・王弼注、尚書孔安國・鄭玄注、三禮・毛詩鄭玄注、左傳服虔・杜預注、孝經孔安國・鄭玄注、論語鄭玄・何晏注、

とあり、学令に大学寮で教授すべき書が規定されている。その中で『論語』については、後漢の鄭玄（一二七～二〇〇）の『論語鄭玄注』と何晏の『論語集解』が規定されている。

では、『養老令』の基となった唐令を見ると、

諸教授正業、周易鄭玄・王弼注、尚書孔安國・鄭玄注、三禮・毛詩鄭玄注、左傳服虔・杜預注、公羊何休注、穀梁范甯注、論語鄭玄・何晏注、孝經孔安國・鄭玄注、老子河上公注、

とあり、やはり、『論語』注釈書については『養老令』と同一の『論語鄭玄注』と何晏の『論語集解』が規定されている。本稿で取り上げている『論語』注釈書については、『養老令』と唐令は異同がなく、前者は後者を踏襲したものと推測される。

しかし、学令に規定された漢籍のみが流布し講読されたと見ることができるだろうか。

後述の如く、日本古代典籍には、皇侃の『論語義疏』も数多く引用されている。そこで、日本古代の『論語』注釈史上に於ける『論語義疏』の相対的位置を大局的に究明するため、既に『論語義疏』の引用文辞の性格について検討した、『令義解』・『弘決外典鈔』・『政事要略』・『令義解』「上令義解表」（以下、「上表文」と略称する）等の注釈の、各書に引用される『論語』注釈書の一覧を以下に掲げ、『論語』注釈書の受容の状況、及びその中の『論語義疏』の位置を考察していく。なお、『政事要略』

と密接な関係にある『小野宮年中行事裏書』に引用される『論語』注釈書も検討材料に加える。

第一項 『令集解』諸説

貞観年間（八五九～八七七）に明法博士惟宗直本により編纂された『令集解』に引用される『論語』注釈書は全四三箇条認められる。以下の表 1 に列挙する。

表 1

	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	『論語』注釈書名	篇名	『令集解』の令名・条名	『令集解』諸説名	頁数・行数
	義疏	集解	集解	義疏	義疏	義疏	集解	集解	義疏	論語（経文）	集解	集解	集解					
	八份	為政	為政	為政	皇序	雍也	雍也	微子	八份	八份	堯曰	子路	八份					
	戸令・聴養条	僧尼令・德行积	僧尼令・德行积	東宮職員令・東宮傳条	後宮職員令・書司条	職員令・左衛士府条	職員令・左衛士府条	職員令・民部省条	職員令・中務省・画工司条	職員令・神祇官条	職員令・神祇官条	官位令	官位令					
	积	古記	积	古記	古記	古記	积	古記	积	或云	或云	或云	或云					
	272 — 4 左	233 — 4 右	233 — 3 左	183 — 1 右	174 — 3 左	144 — 3 右	144 — 3 右	95 — 6 右	74 — 8 左	28 — 6 行間書入	28 — 6 行間書入	4 — 7	4 — 5					

35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
論語（経文）	集解	集解	義疏	論語（経文）	義疏	義疏	集解	集解	義疏	集解	集解	論語（経文）	義疏	集解	論語（経文）	論語（経文）	論語（経文）	集解	集解	集解	義疏
子路	公冶長	子罕	陽貨	先進	述而	述而	為政	為政	先進	八份	郷党	子路	子路	公冶長	公冶長	学而	学而・公冶長	学而	学而	雍也・子張	為政
継嗣令・定嫡子条	継嗣令・定嫡子条	選叙令・秀才進士条	選叙令・郡司条	選叙令・応選条	学令・在学為序条	学令・在学為序条	学令・积奠条	学令・积奠条	賦役令・孝子条	賦役令・辺遠国条	賦役令・調絹絶条	田令・賃租条	田令・園地条	戸令・国遣行条	戸令・国遣行条	戸令・国遣行条	戸令・国遣行条	戸令・国遣行条	戸令・国遣行条	戸令・国遣行条	戸令・国遣行条
古記	积	积	积	古記	古記	积	古記	积	古記	积	古記	古記	古記	古記	古記	讀	古記	古記	古記	古記	讀
524 — 4 左	524 — 4 右	505 — 3 右	487 — 3 右	468 — 1 左	446 — 8 右	446 — 7 右	446 — 3 左	446 — 3 右	412 — 3 左	404 — 1 右	385 — 4 右	361 — 4 右	357 — 4 右	328 — 1 左	323 — 9 右	323 — 5 左	323 — 2 右	323 — 1 右	322 — 3 左	322 — 2 右	320 — 9 右

36	義疏	為政	考課令・五常事	釈	557 3右
37	論語(經文)	先進	考課令・徳義者内外称事	古記	557 9右
38	義疏	為政	考課令・徳義者内外称事	古記	557 9右
39	論語(經文)	里仁	考課令・最条	古記	568 1右
40	集解	雍也	考課令・最条	釈	573 8左
41	集解	為政	考課令・最条	古記	574 4左
42	論語(經文)	子張	考課令・最条	釈	576 1左
43	集解	子路	考課令・最条	古記	576 2左

凡例

○当該表の作成に当たっては、『令集解』の底本に新訂増補国史大系二三卷『令集解』前篇(一九六六年、吉川弘文館)、同二四卷『令集解』後篇(一九六六年、吉川弘文館)を用いた。

○『令集解』の該当箇所は、新訂増補国史大系本の頁数・行数・双行の左右によって示した。

(例)「74―8左」は、「74頁8行左」を指す。

○なお、当該表の作成に当たって、戸川芳郎・新井榮藏・今駒有子編『令集解引書索引』(一九九五年訂正版、汲古書院)及び奥村郁三編著『令集解所引漢籍備考』(関西大学東西学術研究所研究叢刊一四)二〇〇〇年、関西大学出版部)を参考にした。

以上を、まず、『論語』注釈書ごとに分類すると、『論語集解』が二〇箇条、『論語義疏』が一三箇条それぞれ認められる。なお、経文を引用するのみで、如何なる『論語』注釈書を利用しているかの引用か判断し難いものが一〇箇条存する。

次に、これらを明法家による大宝・養老令の諸説ごとに分類する。

「古記」全二三箇条のうち、『論語集解』が一〇箇条、『論語義疏』が七箇条それぞれ認められる。また、経文のみを引用するものが六箇条存

する。

「釈」全二三箇条のうち、『論語集解』が七箇条、『論語義疏』が五箇条それぞれ認められる。また、経文のみを引用するものが一箇条存する。「讃」全二箇条のうち、『論語義疏』が一箇条認められるに過ぎず、『論語集解』の引用は認められない。また、経文のみを引用するものが一箇条存する。ただし、引用条数が少ないので、利用実態の分析には適しない。

「或云」全四箇条のうち、『論語集解』が三箇条認められるが、『論語義疏』の引用は認められない。また、経文のみを引用するものが一箇条存する。ただ、「或云」の撰述者や成立期が詳かではなく、利用実態の詳細は不詳である。

これらをまとめると、次の如き事柄が言えよう。

第一に、先の表1のうち、「古記」による引用と見られる『論語義疏』は、8・9・10・22・26・30・38の七箇条が存する。このことから、「古記」成立期である天平一〇年(七三八)頃には既に『論語義疏』が日本に伝来していたことは明らかである。

第二に、「古記」並びに延暦六―一〇年(七八七―七九一)頃に成立した「釈」⁽²³⁾ともに、『論語義疏』の他、『論語集解』が『論語』注釈書として、利用されている。「古記」「釈」何れも『論語集解』が『論語義疏』に比して引用条数がやや多いものの、八世紀に於いては、『論語集解』と『論語義疏』の利用はほぼ拮抗していたことが看取される。

以上の如く、『論語義疏』は八―九世紀を通じて、「古記」「釈」「讃」の明法官人に利用された。

第二項 『弘決外典鈔』

正暦二年(九九一)に村上天皇の第七皇子具平親王により撰述された『弘決外典鈔』に利用される『論語』注釈書は全一六箇条認められる。

以下の表2に列挙する。

表2

	『論語』注釈書名	篇名	『弘決外典鈔』の巻数・ 篇数（止観輔行伝弘 決の巻数）	頁数・行数	備考
1	集解	子罕	卷一序	6下―3	
2	義疏	衛霊公	卷一序	7上―10	
3	義疏	季氏	卷一一	12下―2	疏文を利用した案語
4	義疏	季氏	卷一一	12下―4	疏文を利用した案語
5	義疏	季氏	卷一一	12下―6	疏文を利用した案語
6	義疏	雍也	卷一二	22上―11	
7	集解	先進	卷一二	23下―8	
8	鄭玄注	衛霊公	卷一二	27下―16	
9	集解	学而	卷二三	41上―15	
10	集解	為政	卷二四	47上―4	
11	義疏	陽貨	卷三五	60下―8	
12	義疏	微子	卷三五	66下―9	
13	集解	里仁	卷三六	72上―8	
14	義疏	子罕	卷三六	77上―7	
15	論語（経文）	為政	卷四八	90上―1	
16	論語（経文）	為政	卷四八	90上―12	

凡例
○当該表の作成に当たっては、『弘決外典鈔』の底本に天台宗典編纂所編『続天台宗全書 顕教3 弘決外典鈔 玄義・文句外勘鈔』（一九八八年、春秋社）を用いた。

○『弘決外典鈔』の該当箇所は、続天台宗全書本の頁数・上下段の別・行数によって示した。

（例）「6下―3」は、「6頁下段3行」を指す。

○なお、当該表の作成に当たって、尾崎康「弘決外典鈔引書考並索引」（『斯道文庫論集』三輯、一九六四年）を参考にした。

先の表2を『論語』注釈書ごとに分類すると、『論語義疏』が八箇条、『論語集解』が五箇条、『論語鄭玄注』と見られるものが一箇条それぞれ認められる。なお、経文を引用するのみで、如何なる『論語』注釈書を利用している引用か判断し難いものが二箇条存する。

『弘決外典鈔』に於ける『論語』注釈書の利用は、『論語義疏』が『論語集解』に比して、やや上回るものの、両書はほぼ拮抗していたと見ることができよう。

以上の如く、村上天皇第七皇子の具平親王は、『止観輔行伝弘決』所引外典を講究するために、『論語義疏』・『論語集解』等を利用した。これについては、第三章で後述する。

第三項 『政事要略』

長保二年（一〇〇二）に明法博士惟宗（令宗）允亮により撰述された『政事要略』に引用される『論語』注釈書は全一八箇条認められる。以下の表3に列挙する。

表3

	『論語』注釈書名	篇名	『政事要略』の巻数・篇名	頁数・行数	備考
1	集解	郷党	卷二九 年中行事十二月下（追儼）	210―14	旧記所引
2	義疏	郷党	卷二九 年中行事十二月下（追儼）	211―1	旧記所引

凡例

○当該表の作成に当たっては、『政事要略』の底本に新訂増補国史大系

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
論語(経文)	論語(経文)	集解	論語(経文)	論語図注	論語図	論語図	集解	集解	義疏	義疏	集解	集解	義疏	論語図	論語(経文)
里仁	衛霊公	子張 季氏 衛霊公	憲問	不明	不明	不明	八佾	堯曰	八佾	郷党	郷党	陽貨	憲問	不明	郷党
卷九五 至要雜事(学校)	卷九五 至要雜事(学校)	卷八四 糺彈雜事(自首覺 挙)	卷八二 糺彈雜事(罪名并 贖銅八虐六議)	卷八二 糺彈雜事(罪名并 贖銅八虐六議)	卷八二 糺彈雜事(罪名并 贖銅八虐六議)	卷八二 糺彈雜事(罪名并 贖銅八虐六議)	卷八二 糺彈雜事(罪名并 贖銅八虐六議)	卷八一 糺彈雜事(断罪)	卷六八 糺彈雜事(至敬拝 礼下馬)	卷六七 糺彈雜事(男女衣 服并資用雜物)	卷六七 糺彈雜事(男女衣 服并資用雜物)	卷六七 糺彈雜事(男女衣 服并資用雜物)	卷六七 糺彈雜事(男女衣 服并資用雜物)	卷二九 年中行事十二月下 (追儼)	卷二九 年中行事十二月下 (追儼)
710 — 9	710 — 8	682 — 11	652 — 5	651 — 2	651 — 1	651 — 1	648 — 8 — 9 行間書入	629 — 1	581 — 5	560 — 16	550 — 2	549 — 16	540 — 14	214 — 2	211 — 10
私教類聚所引	私教類聚所引	私教類聚所引	三礼図所引	佚書	佚書	佚書	骨云所引				或云所引カ	或云所引カ		佚書	旧記所引文選李善 注に引く薛綜注張 衡二京賦カ

二八卷『政事要略』(一九六四年、吉川弘文館)を用いた。

○『政事要略』の該当箇所は、新訂増補国史大系本の頁数・行数によって示した。

(例)「210—14」は、「210頁14行」を指す。

○なお、当該表の作成に当たって、木本好信・大島幸雄・正野順一・吉永良治編『政事要略総索引』(一九八二年、国書刊行会)及び阿部猛編『詳細政事要略索引』(二〇〇七年、同成社)を参考にした。

以上を『論語』注釈書ごとに分類すると、『論語集解』が六箇条、『論語義疏』が四箇条、『論語図』が三箇条、『論語図注』が一箇条それぞれ認められる。なお、経文を引用するのみで、如何なる『論語』注釈書を利用するかの引用か判断し難いものが四箇条存する。

傾向として、次の如きことが言える。

第一に、『論語集解』が『論語義疏』に比して引用条数が若干多いものの、両書の引用はほぼ拮抗している。従って、惟宗允亮は、『論語』注釈書として、『論語義疏』と『論語集解』を十分に活用していたことがわかる。

第二に、『政事要略』に引用される『論語義疏』のうち、表3の2については「旧記」を介して、惟宗允亮が引用したと見られる。その他「旧記」を介しての『論語』注釈書の引用には、『論語集解』が一箇条、『文選李善注』に引く『薛綜注張衡二京賦』と推測される注釈を介して経文のみの引用が一箇条、それぞれ認められる。

第三に、「私教類聚」並びに「骨」を介して『論語集解』の引用が認められる。「私教類聚」は吉備真備(六九五—七七五)によって神護景雲三年(七六九)頃に撰述された教訓書である。⁽²⁵⁾「骨」は唐の永徽四年(六五三)以後、唐末までに成立した唐律疏の注釈書『律疏骨髄録』で、貞観(八五九—八七七)以後寛弘(一〇〇四—一〇一二)以前に日本へ伝来したものである。⁽²⁶⁾両書は佚書となっており、佚文として片鱗が残るに

過ぎない。

第四に、『論語図』及び『論語図注』からの引用が認められるが、両書が中国に於ける撰述か日本に於ける撰述かは未詳である。『論語義注図』一二巻が『隋書』経籍志に著録されているものの、これと両書との関係は不明である。

以上のことから、惟宗允亮は、朝儀・吏務の先例を明らかにするため、少なくとも『論語義疏』並びに『論語集解』等の『論語』注釈書を利用したことが明らかである。

第四項 『小野宮年中行事裏書』

『小野宮年中行事裏書』⁽²⁸⁾（長元二年（一一〇二）以後成立）は、右大臣小野宮家藤原実資（九五七―一〇四六）が撰した『小野宮年中行事』に実資自らが加えた裏書・首書を書写したものである。

『小野宮年中行事裏書』に引用される『論語』注釈書は次の表4に掲げた如く、一箇条のみ認められる。

表4

	『論語』注釈書名	篇名	丁数・行数
1	義疏	八佾	3裏―9

凡例

○当該表の作成に当たっては、『小野宮年中行事裏書』の底本に鹿内浩胤「『小野宮年中行事裏書』（田中教忠旧蔵『寛平二年三月記』）影印・翻刻」（『禁裏・公家文庫本研究』一輯、二〇〇三年）所収「翻刻」を用いた。

○『小野宮年中行事裏書』の該当箇所は、右の「翻刻」に付された原本の丁数、表裏の別、及び行数によって示した。
（例）「3―裏9」は、「第3丁裏9行」を指す。

『論語義疏』の引用が一箇条認められるに過ぎず、『論語』注釈書の利用傾向を見るのは難しい。実資は、『小野宮年中行事』を編纂するに当たり、『政事要略』を参考にしていたこと、また実資の依頼により『政事要略』の編纂が企図された可能性があること等が先学により指摘されている。⁽²⁹⁾ 本引用は、実資が、『政事要略』に引用された『論語義疏』を参照し、裏書として書入れた可能性がある。

第五項 『令義解』「上表文」等の注釈

『令義解』は、天長一〇年（八三三）に淳和天皇の詔を受けて、右大臣清原夏野・文章博士菅原清公等によって編纂された『養老令』の公的注釈書である。『令義解』「上表文」等の注釈に、『論語』注釈書の引用は、全四箇条認められる。以下の表5に示す。

これらを『論語』注釈書ごとに分類すると、『論語集解』、『論語義疏』が各一箇条認められる。なお、経文を引用するのみで、如何なる『論語』注釈書を利用しているかの引用か判断し難いものが二箇条存する。

表5

	『論語』注釈書名	篇名	『令義解』の引用箇所	頁数・行数
1	論語（経文）	憲問	詔令義解領下	347―5左
2	義疏	雍也	上令義解表文	348―9右
3	集解	子路	上令義解表文	349―4左
4	論語（経文）	序	令義解序	353―8右

凡例

○当該表の作成に当たっては、『令義解』の底本に新訂増補国史大系二二巻『律・令義解』（一九六六年、吉川弘文館）を用いた。
○『令義解』の該当箇所は、新訂増補国史大系本の頁数・行数・双行の

左右によって示した。

(例)「347―5左」は、「347頁5行左」を指す。

『論語集解』並びに『論語義疏』の引用が一箇条づつ認められるのは、「上表文」の注釈である。「上表文」の注釈の成立期・撰者は明らかではない。ただし、鎌倉時代書写に係る広橋本『令義解』に「上表文」の注釈が存することから、鎌倉時代以前には「上表文」の注釈が成立していたことは明らかである。更に、そこに『論語集解』と『論語義疏』の引用が認められることから、この両書の引用も鎌倉時代以前に存在したものと見て大過なからう。この時代に於いても『論語義疏』が利用されていたことが窺われる。

第六項 小結

以上、『令集解』・『弘決外典鈔』・『政事要略』・『小野宮年中行事裏書』・『令義解』「上表文」等の注釈、の各書に引用される『論語』注釈書について考察した結果、『養老令』学令では、『論語鄭玄注』並びに『論語集解』のみ規定されているが、学令の規定は、日本古代の論語学の実状を反映したものではなく、唐令の規定を踏襲したものと推定される⁽³⁰⁾。従って、日本古代に於いて『論語集解』と『論語義疏』はともに広く流布し、受容された。更に、両書は日本古代の論語学並びに『論語』注釈史上、比肩する存在であり、『論語図』及び『論語図注』(ともに『政事要略』所引)等の他の『論語』注釈書に比して、圧倒的に受容されたものと言える。

なお、『弘決外典鈔』前掲表2の8は、『論語鄭玄注』を単独で引用するかに見受けられるが、『論語鄭玄注』は単独の成書としては受容されず、『論語集解』もしくは『論語義疏』を介して間接引用したものと推測される⁽³¹⁾。

③ 日本古代に於ける『論語義疏』受容の諸相

本章では、日本古代に於ける『論語義疏』の受容の諸相について見ていく。日本古代での『論語義疏』の受容の実相と変遷を把握するには、(一)日本古代典籍に引く『論語義疏』、(二)古記録に現れる『論語義疏』、(三)蔵書目録への著録状況を搜索し、検証する必要がある。併せて、次の表6に掲出した日本古典籍の撰述者等とその周辺の人的交流・環境についても考察していく。

管見の及ぶところ搜索し得た『論語義疏』の存在を現す事象を、時系列に従って、以下の表6に掲げる。

表6に掲げる他、寛弘四年(一〇〇七)に源為憲によって撰せられた『世俗諺文』にも『論語義疏』の引用が存する。ただし、これは、皇侃の『論語義疏』以外の疏、例えば、六朝梁の褚仲都(生歿年不詳)の『論語疏』一〇巻を想定することも可能であるが、俄かには同定し難い。⁽³²⁾

表6

	書名	撰者名	成立年代	所蔵者	備考
1	「古記」 〔令集解〕所引		天平一〇年 (七三八)頃	国立公文書館内閣文庫・国立国会図書館・宮内庁書陵部・国立歴史民俗博物館等	
2	「釈」 〔令集解〕所引		延暦六、一〇年 (七八七～七九二)頃	同右	
3	「讃」 〔令集解〕所引		弘仁・貞観期 (八一〇～八七七)頃	同右	
4	「秘密曼荼羅十住心論」	空海	天長七年(八三〇)頃	高山寺・高野山金剛三昧院	

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
『全経大意』	『令義解』上表 文の注釈	『和漢朗詠註略抄』	『三教指帰注』	『往生要集外典鈔』	『台記』	『般若心経秘鍵開門訣』	『三教指帰注集』	『小野宮年中行事裏書』	『政事要略』	『弘決外典鈔』	『妙法蓮華経釈文』	『日本国見在書目録』
不明	不明	無名カ	覚明	平基親	藤原頼長	濟暹	成安	藤原実資	惟宗允亮	具平親王	中算	藤原佐世
不明	鎌倉時代以前	平安時代末期～鎌倉時代初期カ	平安時代末期～鎌倉時代初期カ	不明	康治元年(一一四二)・同二年(一一四三)・天養元年(一一四四)※	承徳元年(一一九七)	寛治二年(一一八八)	長元二年(一一二九)以後	長保四年(一一〇二)	正暦二年(九九二)	貞元元年(九七六)	貞観一七年(八七五)～寛平一〇年(八八九)頃
金剛寺	国立公文書館内閣文庫・国立歴史民俗博物館等	不明	慶應義塾図書館	真福寺宝生院真福寺文庫	国立公文書館内閣文庫・宮内庁書陵部等	高野山光台院・高野山大学図書館増福院文庫・智積院智山書庫	大谷大学博物館	国立歴史民俗博物館	大阪府立大学学術情報センター福田文庫等	久遠寺身延文庫・称名寺等	醍醐寺	宮内庁書陵部
藤原頼長の学問との近縁性が指摘されている。		詳	撰者の生歿年不詳	撰者の生歿年不詳	※『論語義疏』講読の事跡が認められる年			撰者の生歿年九五七～一〇四六				

凡例

○成立年代が不詳のものは、参考として備考覧に撰者の生歿年を西暦で記した。

先の表6から、次のことが看取される。

『論語義疏』が日本古代に於いて、律令(表6の1・2・3・8・16)・仏教(4・6・7・10・11・13・14)・宮廷儀式(8・9)・文学(15)の各分野に関わる典籍に引用され、親王(7)・公卿(9・12)・官人(1・2・3・8・13)・积家(4・6・10・11・14)に広範に利用されていたことが見て取れる。更に、积家については、真言(4・10・11・14)・南都仏教(6)・天台(7)・浄土教(13)の章疏解釈の際等に利用されていたことが言える。

以下、時系列に従って見ていこう。

八～九世紀の明法官人では、『令集解』所引「古記」が『大宝令』を、「釈」及び「讃」が『養老令』を注釈する際に『論語義疏』を利用し、それら『論語義疏』の引用を含めた各注釈を明法博士惟宗直本(生歿年不詳)が『令集解』編纂(貞観年間(八五九～八七七)頃)に際して、利用した。更に、前章で述べた如く、『令集解』に引用される「古記」は天平一〇年(七三八)頃、「釈」は延暦六～一〇年(七八七～七九二)、「讃」は弘仁・貞観期(八一〇～八七七)頃にそれぞれ成立したとするのが通説であり、従って、『論語義疏』の引用の初見は、「古記」が引用するものと見なしてよからう。してみれば、『論語義疏』は天平一〇年頃には、既に日本に伝来していたことは明らかである。

九世紀では、弘法大師空海(七七四～八三五)が『秘密曼荼羅十住心論』(天長七年(八三〇)頃成立)に於いて、『論語義疏』を引用している。空海は、讃岐国多度郡少領佐伯田公の子息、初名は真魚と言う。伊予親王の侍講である舅父(母方の伯叔父)の阿刀大足から、『論語』・『孝経』、史伝、文章等を、大学寮にあつては直講味酒浄成に『毛詩』・『春

秋左氏伝』・『尚書』を、更に明経博士岡田牛養に『春秋左氏伝』をそれぞれ学んだ⁽³⁵⁾。本書の他、空海が撰した『三教指帰』・『文鏡秘府論』・『篆隸万象名義』・『遍照發揮性靈集』の内容から、空海の漢籍・漢学の学識が見て取れるが、その素地として、右に触れた官人から伝授された漢籍・漢学の知識があったことが言えよう。その一端を顕すのが『秘密曼荼羅十住心論』に引く『論語義疏』であって、空海が『論語義疏』を講読していたことは想像に難くない。更に、空海の出自も注目される。空海は讃岐国佐伯氏の出身であり、同族には、初代東寺長者に就任した実恵（一名、檜尾僧都・道興大師）がいた。実恵は、漢学の素養があり、書博士佐伯葛野と同佐伯酒麻呂に儒学を学んでいる。佐伯葛野は田公の孫、すなわち空海の甥、酒麻呂は田公の子息、すなわち空海と兄弟の關係に当たり、また、酒麻呂の子息豊雄も書博士となっている。このように、讃岐国の佐伯氏から多くの書博士を輩出していることも、空海の漢籍・漢学の学識を養う上で、基底になったと考えられるだろう。

一〇世紀後半には、中算（生歿年不詳）の撰にかかる『妙法蓮華經釈文』の中に『論語義疏』の引用が認められる。中算は、興福寺松室貞松房に住した学侶である。本書の撰述の経緯については、序に、藤原文範（九〇九～九九六）の命を受けて貞元元年（九七六）に脱稿したことが記され、更に卷下末葉の奥書によると、清書せぬうちに中算が歿したため、弟子の真興が師の遺命を受けて完成させ、文範に献上したことが記されている。

本書の撰述を中算に依頼した藤原文範は、北家長良流出身の儒者で、経歴を見ると文章生を経て、少内記・藏人・式部少丞・式部大丞・右衛門権佐・左少弁・右中弁・左中弁・右大弁・左大弁・参議・権中納言・中納言に任じられたが、とりわけ文章生の後、内記・式部丞・弁官を歴任したことが注目される。文範は文章生出身であるから、漢籍を学んでおり、漢籍・漢学・漢詩文に通じていたことが推測される。

本書は、『法華經』の字句を抄出し、音義訓釈を付した字書的性格を有するものである。中算は、本書の引用漢籍を見ても、内典に止まらず外典（漢籍）、就中、訓詁学に精通していたことが窺われよう。従って、漢唐訓詁学のうち、義疏の学の素養も当然具有していたと推測され、『論語義疏』の引用が認められることがそれを顕していると言えよう。更に、書名に「釈文」の名が付されていることから、奈良時代書写と推定されている興福寺所蔵『經典釈文』（第十四札記音義⁽⁴⁰⁾）との關係が想起されよう。興福寺には、『經典釈文』の他に奈良時代または平安時代初期の書写と推定されている『講周易疏論家義記』残卷が蔵せられている。また、奈良時代から平安時代前期の興福寺の学侶善珠の『唯識義灯増明記』に於いても義疏類が引用されている。『妙法蓮華經釈文』・『經典釈文』（第十四札記音義）・『講周易疏論家義記』残卷や『唯識義灯増明記』は、奈良時代から平安時代中期の南都法相宗に於いて、漢籍・漢学、とりわけ義疏の学が講究されたことを示す証左と言えるが、その一つに『論語義疏』の存在が窺われる。

一〇世紀末～一一世紀初頭になると、具平親王⁽⁴³⁾（九六四～一〇〇九）による『論語義疏』の利用が顕著である。『弘決外典鈔』（正暦二年（八九一）成立）を撰述した具平親王は、文章生から大内記となった慶滋保胤⁽⁴⁴⁾や侍読の橘正通⁽⁴⁵⁾に師事した。

具平親王が『弘決外典鈔』を撰述した背景は、師慶滋保胤を通じて、天台僧増賀上人に教えを受け、叡山横川に於いて止観を学んだことにある。ある僧侶に依頼されて、本書を撰し、増賀上人に贈って是正を乞うた。

具平親王は、一〇世紀末～一一世紀初頭の一条天皇の時代に於ける文壇の中心的存在であり、経学・漢詩文・和歌・仏道・管弦・医術に通曉し、能書家でもあった。親交があり、具平親王の書斎桃花閣⁽⁴⁷⁾に集ったと思しき人物は、先の保胤・正通の他、大江匡衡・大江以言・紀齊名・源

順・源為憲・菅原資忠・藤原為時・藤原惟成等の中下級貴族である文人達、藤原齊信・藤原公任・藤原行成の如き文才に長けた公卿達である。具平親王が該博な学殖に裏打ちされた比類無き文人であることは言うを俟たない。更に、『弘決外典鈔』所引漢籍⁽⁴⁸⁾を見ても、漢籍・漢学の素養がいかに深遠であるかを窺い知れよう。従って、『論語義疏』の講説は言うに及ばず、広範に漢籍を講読していたことは想像に難くない。また、具平親王が漢籍を所蔵しており、それを行成が借用したことは『権記』⁽⁴⁹⁾から見て取れ、具平親王の人的交流の中での漢籍貸借の一端がわかる。具平親王の書斎桃花閣所蔵の漢籍の一つとして、『論語義疏』が存在した可能性が高いであろう。

一一世紀前半では、惟宗家と小野宮家の周辺で『論語義疏』の受容が見られる。

惟宗直本の曾孫または孫と言われている明法博士惟宗允亮⁽⁵⁰⁾（生年不詳（一〇〇九頃力）が長保四年（一〇〇二）に撰述した『政事要略』に於いても、『論語義疏』を利用している。『政事要略』に引用された『論語義疏』の多くは、類書等が介在しない直接引用と推定されること⁽⁵¹⁾から、允亮は、『論語義疏』の鈔本を目録し得る環境にあったことが推測されることは旧稿⁽²⁾で述べた。つまり、『論語義疏』の鈔本は、允亮以前から惟宗家に伝来したものであった可能性が考えられる。

他方、小野宮家と『政事要略』は密接な関係にあった。『小野宮年中行事裏書』所引『論語義疏』は、『政事要略』からの間接引用と推定⁽⁵²⁾され、実資を始めとする小野宮家の人物は、惟宗家伝来の『論語義疏』を目録し得る環境にあったであろうことは旧稿⁽²⁾で述べたが、更に一步踏み込んで、小野宮家にとっては、有職故実を家学として相伝する上で漢籍・漢学の知識は必須であって、小野宮家に『論語義疏』を含む漢籍を所蔵していたと推論することも不可能ではあるまい。

一一世紀後半以降、釈家に於ける『論語義疏』の受容が顕著になる。

この傾向は、中世まで綿々と続く。管見の及ぶところ、その濫觴として、濟暹⁽⁵³⁾（一〇二五―一一一五）の撰にかかる『般若心経秘鍵開門訣』に『論語義疏』が引用される。濟暹は、東密に精通し、仁和寺慈尊院に住した学侶で、南岳房僧都とも称された。濟暹は、空海の遺業を継いで、『遍照發揮性靈集』の散佚した巻第八―一〇を『統遍照發揮性靈集補闕鈔』三巻として編集して補い、一〇巻本とした。これが現行本『遍照發揮性靈集』一〇巻であることは夙に知られている。その他、撰述したものは『遍照發揮性靈集』の注釈書『顯鏡鈔』を始め六六部九五巻を数え、学侶として名高い。仁和寺二世門跡大御室性信入道親王（三条天皇の皇子師明親王）から伝法灌頂を授けられた。『統遍照發揮性靈集補闕鈔』や『顯鏡鈔』を撰述していることから、濟暹は漢籍・漢学に通じており、仁和寺周辺に『論語義疏』を含む漢籍が存在していたことが推測される。

一二世紀前半になると、『台記』の記主である左大臣藤原頼長⁽⁵⁴⁾（一一二〇―一一五六）が『論語義疏』を講読した事跡が『台記』に全五箇条認められる。

まず、頼長の周辺⁽⁵⁵⁾について述べる。頼長が漢籍を広範に講読し経学に精通していたことは、『台記』・『台記別記』・『宇槐記抄』を繙けば誰もが首肯できよう。

以下に、頼長が師礼をとった人物を挙げる。（１）『台記』の中で先師と呼称される源師頼をまず挙げるべきであろう。師頼は弁官・藏人頭・大納言等を歴任した人物で、頼長は、師頼が大江匡房から伝授された『漢書』を学んだ。また、（２）藤原令明は式家出身の儒者で、内記に任じられ、また、摂関家の家司を務めた。頼長は令明から『孝経』・『文選李善注』を学んだ。（３）明経准得業生から外記・大学助教を歴任した中原師安からは『論語』・『古文孝経』・『御注孝経』を学んだ。（４）南家出身で、曾祖父藤原実範以来の儒家であり、博学として知られた藤原通憲（信西入道）からは、易筮を学んだ。（５）頼長の家司であった少

納言源俊通は、頼長が主催する『礼記』・『春秋』・『老子』等の談義の講師・問者を務めている。

この他にも、頼長と交流があり、談義に参加した人物は、令明の子息の藤原敦任、外記・明経博士となった清原頼業、文章博士・大学頭菅原時登の養子菅原登宣、中原師安の弟の中原師元（外記・明経博士）等を挙げることができる。当時の中下級の貴族や官人である文人・学者に師事し、交流をするとともに、自らも研鑽し、当代随一の漢籍・漢学の学識を身に付けていったことが窺われる。

では、実際に『台記』の記事を見ていく。

①『台記』康治元年（一一四二）七月八日条

見始論語皇侃疏、

②『台記』同年同月二九日条

論語皇侃疏^{十卷} 見了、

③『台記』康治二年（一一四三）九月二九日条

^{〔論語〕}同皇侃疏十卷、^{首付、書}本書裏、康治元年、

④『台記』同年一二月七日条

^{〔周易〕}人傳云、學此書者有凶云々、又云、五十後可學云々、余案之、

此事更無所見、如論語皇侃疏者、少年可學之由、所見也、

⑤『台記』天養元年（一一四四）一二月二四日条

^{〔清原〕}先使定安參大學、所請、披覽之書^{五經正義、公羊解微、穀梁疏、論語皇侃疏、孝經述義等也} 皆

見之、首付勾要文了、

①②からは、康治元年の七月八日に『論語義疏』を読み始めて、同月二九日に読み終えたことが知られる。二二日間の短期間で読了したことになり、頼長の深遠な学識が窺われる。③は、頼長の読書目録が記されており、康治元年（①②を指す）に『論語義疏』を読了したことを示している。④は、『周易』を学ぶと不吉であり、また五〇歳以後に学ぶべきであると言う説について、頼長は、証拠は無く、『論語義疏』は若い

時に学ぶべきであると見えることを、述べている。⑤は、頼長が予め助教の清原定安を大学に遣して『論語義疏』等を請求し、講読していたことが見て取れる。

なお、『台記』の記事を後世に抄出した『宇槐記抄』⁽⁵⁷⁾の仁平元年（一一五一）九月二四日条に、頼長が劉文冲と名乗る宋商人に「求書目録」を提示し、入手を依頼した漢籍が記されており、『論語』注釈書の名が見える。以下に示せば、

名賢論語會解

論語會

全解

正義

秀義

志明義

述義

論語律

の八種の注釈書を挙げている。⁽⁵⁸⁾以上の八種のうち、撰者を同定し得るのは、『論語述義』⁽⁵⁹⁾は隋の劉炫（生歿年不詳）、『論語正義』⁽⁶⁰⁾は北宋の邢昺（九三二―一〇一〇）、『論語全解』⁽⁶¹⁾は北宋の陳祥道（一一〇五―一〇九三）の三種のみで、他の五種は管見の及ぶ限り詳らかではない。ただし、頼長が当該条に見える『論語』注釈書をその後入手することができたか否かは記録に見えないが、存在を知り得ていたことは確かであろう。ここから、頼長の『論語』注釈書受容・講読の傾向を俄かには推測し難いが、義疏学の成果である『論語述義』、及び『論語義疏』と『論語正義』とともに、宋学の『論語全解』の入手を依頼したことは、中世に至り本格的に受容される宋学の濫觴を検討する上で看過し得ない事跡である。⁽⁶²⁾

頼長は『論語義疏』を講読していた。また、清原定安を大学に遣したことから見て、定安も『論語義疏』の存在を知り得ており、更に当時の

大学に『論語義疏』が蔵せられ、講読に供せられていたことが推測される。従って、平安時代末期、一二世紀の公家社会には、かなり広範囲に『論語義疏』が流布していたことがわかる。

一二世紀後半では、非参議平基親(一一五一―歿年不詳)が撰述した『往生要集外典鈔』⁽⁶⁴⁾に『論語義疏』の引用が認められる。基親は院政期の官人であり、桓武平氏高棟流の行親の六世孫である。基親は建永元年(一二〇六)に出家し、法然上人に帰依した。『往生要集外典鈔』の他に『官職秘抄』・『帝王広系図百卷』・『雜例抄』・『選撰本願念仏集序』・『善道和尚画讃』・『浄土五観図縁起』を撰述した。これらの典籍を撰述する素養の源泉と思しき存在について、九条兼実の日記『玉葉』⁽⁶⁵⁾安元三年(治承元年)(一一七七)七月一八日条に、

文書燃失事、時範・定家・親範三代記録、大都取出、但三分之一焼了、其外史書之類、少々出、自餘七百餘合併以焼失、十代之文書一時滅亡、是家之尽也云々、

と記し、安元の大火に罹災するまで、基親の家は「日記の家」⁽⁶⁶⁾として代々の日記を所蔵していた他、史書等の典籍・文書類を多く所蔵していたことが看取される。また、基親の経歴を見ると、国司を経て、勘解由使・蔵人・右少弁・左少弁・権右中弁・右中弁・右大弁・左大弁・兵部卿と主に弁官を歴任した。⁽⁶⁷⁾このように、(一)『官職秘抄』以下、多くの著作があること、(二)基親が弁官を歴任したことから、基親が和漢の書に通じていたことが窺われよう。

ただし、表6に掲げた如く『三教指帰注集』・『三教指帰注』・『和漢朗詠註略抄』・『全経大意』も『論語義疏』を引用しているが、その撰述者については、不詳な点が多い。よって、これらについては、今後の課題としたい。

なお、時期は『令集解』より若干降るものの、平安時代初期に存在した漢籍を知る上で重要な手がかりとなる蔵書目録として、藤原佐世(八

四七―八九七)による『日本国見在書目録』(前掲表6の5)がある。佐世は式家出身で藤原基経の家司を務め、菅原是善の門下で文章博士・大学頭・右大弁・左少弁・右少弁・式部少輔等を歴任した人物である。⁽⁶⁹⁾

本目録は、貞観一七年(八七五)正月二八日に後院である冷然院が焼失し、その蔵書も灰燼に帰したことが編纂の契機となり、焼失後、残存した漢籍の目録を作成したものとする説があり、⁽⁷⁰⁾成立期は貞観一七年以降説や寛平年間(八八九―八九八)説がある。⁽⁷¹⁾これに対し、寛平三年前、すなわち仁和四(八八八)・五年から寛平元・二年頃に存在した漢籍の目録とする説が存する。⁽⁷²⁾本目録の編纂意図や性格は、俄かには何れの説とも断じ難いが、九世紀後半頃には成立していたことになろう。

本目録の論語家に、

論語十卷 鄭玄注

論語十卷 何晏集解

論語六卷 陸善経注

論語義疏十卷 皇侃撰

論語疏十卷 褚仲都撰

論語六卷

論語義一卷

論語音一卷

論語弟子録名一卷

論語私記三卷

孔子正言廿卷 梁武帝撰

の各注釈書が著録されている。これらのうち、書名・撰者・成立時代を同定し得るのは、「論語十卷」^{鄭玄注}は後漢の鄭玄の『論語鄭玄注』、「論語十卷」^{何晏集解}は三国魏の何晏の『論語集解』、「論語義疏十卷」^{皇侃撰}は六朝梁の皇侃の『論語義疏』、「論語疏十卷」^{褚仲都撰}は六朝梁の褚仲都の『論語疏』、「論語義一卷」は東晋の王濛(三〇九―三四七)の『論語義』、「論語音

「一卷」は東晋の徐邈（三四四～三九七）の『論語音』、「論語弟子録名一卷」は後漢の鄭玄の『論語孔子弟子目録』、「孔子正言廿卷」^{（74）}は六朝梁の武帝蕭衍（四六四～五四九）の『孔子正言』^{（帝撰）}である。
従って、『論語義疏』を含むこれら『論語』注釈書は、平安時代初期、九世紀末の冷然院周辺の公家社会等、佐世が目睹し得るところに存在していたことが推測される。

むすびに

縷々述べてきたが、本稿では、次のことが明らかになった。

皇侃の『論語義疏』は、「古記」成立期である天平一〇年（七三八）頃には既に、日本に伝来しており、奈良・平安時代を通じて、親王・公卿・中下級貴族・官人・釈家に受容され、広範に浸透していたであろうことは、推測に難くない。

まず、八～九世紀では、「古記」・「釈」・「讃」の撰者である明法官人によって、律令解釈のため、『論語義疏』が利用されていた。次いで、一〇世紀末～一一世紀初頭に於いては、皇胤である具平親王が『止観輔行伝弘決』講究のために『論語義疏』を利用していた。更に、一一世紀前半では、明法博士惟宗允亮が朝儀・吏務の先例を明らかにするため、右大臣で小野宮家の藤原実資が有職故実の理解のため、『論語義疏』を利用していた。また、釈家では、九世紀で空海、一〇世紀で法相宗興福寺の中算が『論語義疏』をそれぞれ利用していたが、一一世紀後半に至ると、外典講究の一環として『論語義疏』の利用が顕著になっていく。そして、一二世紀前半では、左大臣藤原頼長が幾多の漢籍を講読したが、その一つとして『論語義疏』を講読していた。

此の如く、古代を通じて連綿と『論語義疏』が受容されたが、とりわけ、具平親王と藤原頼長の周辺では、特徴的な漢籍・漢学の講究・談義

の「場」が存在した。一〇世紀末～一一世紀初頭に具平親王の周辺に、文才に長けた公卿や、中下級貴族である文人・学者が多く集まり、論壇が形成された。更に、一二世紀前半に於いては、藤原頼長の周辺に、やはり中下級の貴族や官人である文人・学者が多く集まり、論壇が形成されていた。具平親王と頼長は、何れも当代随一の漢籍・漢学の学殖を有しており、両者を中心とする論壇では、漢籍・漢学の講究・談義が行われていた。講究・談義の題材の一つとして、講読されていたものが、『論語義疏』である。

更に、日本古代に於ける『論語』注釈書について、養老学令では、『論語鄭玄注』並びに何晏の『論語集解』が必須の教授書目として規定されたが、実際は、『論語集解』とともに『論語義疏』も広範に流布し、利用されていた。日本古代に於ける『論語』注釈書の利用状況は、大局的に見て、『論語集解』と『論語義疏』がほぼ拮抗しており、両書は参照すべき『論語』注釈書として、何れも欠くべからざる存在であったことが言える。

右の如く、『論語義疏』を主たる対象としながらも、日本古代に於ける『論語』注釈書受容の実相とその変遷の一斑が明らかになった。ただ、具平親王・藤原頼長、それらの周辺の、公卿・摂関家の家司・官人が、『論語』注釈書受容に果たした役割やその意義が未だ明らかではない。今後の課題の一つである。

また、中世についても、『論語義疏』等の『論語』注釈書を引く中世典籍の性格、成立時期、撰者周辺の人的関係を追究すること、中世の蔵書目録から『論語義疏』等の『論語』注釈書を検索すること、中世の古記録から『論語義疏』等の『論語』注釈書受容の事跡を渉獵すること、等を通じて、中世に於ける『論語義疏』受容の諸相と、『論語義疏』の『論語』注釈書受容史上の相対的位置を明らかにする必要がある。これもまた今後の課題の一つである。

以上の如く、『論語義疏』の受容の現象面の解明に止まり、その社会思想面からの検討等、検討すべき点も尠なく、また、手がかりの尠なさも相俟って、推測に推測を重ねたが、茲に大方諸賢の御批正を乞う次第である。

【謝辞】

成稿に際し、国立歴史民俗博物館教授・総合研究大学院大学教授 井原今朝男、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授 山城喜憲、東京大学史料編纂所特任教授 吉岡眞之の三氏に御示教を賜った。茲に記して御礼申し上げる。

註

(1) 天平二年(七三〇)七月四日の「写書雑用帳」に「論語廿卷」(『大日本古文書一—392頁』、天平年中(七二九—七四九)の「読誦考試歴名」に「丹比真人氣都讀毛詩上帙論語十卷」(『大日本古文書』二四—555頁)とそれぞれ「論語」の名が見える。なお、正倉院文書に見える漢籍については、石田茂作「写経より見たる奈良朝仏教の研究」(一九三〇年、東洋文庫)「附録 奈良朝現在一切経疏目錄」所収「〔附〕漢籍」を参照。

(2) 『論語』を習書した最古の事例は、観音寺遺跡出土の七世紀第Ⅱ四半期(六二五—六五〇)の木簡に「子曰 学而習時不孤□乎□自朋遠方来亦時楽乎人□亦不慍」(『木簡研究』二〇号、一九九八年)。また、『論語集解』の習書には、平城宮出土(二条大路木簡)の天平七—八年(七三五—七三六)頃のものに「□何晏集解 子曰□□とあり(平城宮発掘調査出土木簡概報(二十九)——二条大路木簡三——一九九四年、奈良国立文化財研究所)、東大寺防災施設工事にて出土した天平一九—二〇年(七四七—七四八)頃のものに、

○ 論語序「作心信作心 信心」□第 弟 為 □ 為是□是 哥那 為為為為羽□

とある(『木簡研究』一六号、一九九四年)。「東大寺防災施設工事・発掘調査報告書」発掘調査篇、二〇〇〇年、東大寺。東大寺防災施設工事にて出土したものは何晏『論語集解』と明記されていないが、東野治之氏は、『論語集解』の一部を書写したものであると指摘している(東野治之「論語」と『爾雅』(『東野治之「長屋王家木簡の研究」』所収、一九九六年、塙書房)。

(3) 『養老令』学令先説経文条に、まず経文を読み、その後、に解釈すること、同じ

く教授正業条に、使用すべき『論語』の注釈書として、『論語鄭玄注』及び何晏の『論語集解』が規定されていることから、初学者は経文のみで『論語』を講読したとしても、その後に『論語鄭玄注』ないしは『論語集解』に基づいて講義を受けることが想定されていた。従って、『論語』は、経文のみでは伝来せず、注釈を伴って伝来していたと考えられる。

(4) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』(一九三二年、日本古典全集刊行会。後に一九七〇年復刻版、有明書房。一九八五年復刻版、鳳出版)を参照。

(5) 内野熊一郎「日本古代(上古より平安初期) 経書学的研究」(『日本漢学芸史研究 東京教育大学文学部紀要』二、一九五五年。後に「日本古代平安初中期経書経句説学研究」に改題し内野熊一郎『内野熊一郎博士米寿記念論文集 日本漢文学研究』所収、一九九一年、名著普及会)を参照。

(6) 阿部隆一氏の研究は、
①「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考(上)」(『斯道文庫論集』二輯、一九六三年)

②「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考(下)」(『斯道文庫論集』三輯 松本芳男先生古稀記念論集、一九六四年)を参照。

(7) 和島芳男氏の研究は、

①「日本宋学史の研究 増補版」(一九八八年、吉川弘文館)

②「中世の儒学」(一九六五年、吉川弘文館)を参照。

(8) 高橋智「室町時代古鈔本『論語集解』の研究」(二〇〇八年、汲古書院)を参照。氏には、この他、南北朝時代書写にかかる猿投神社所蔵『論語集解』の三本の書誌と意義を明らかにした「南北朝時代古鈔本『論語集解』の研究—猿投神社所蔵本の意義—」(『斯道文庫論集』四三輯、二〇〇九年)がある。

(9) 武内義雄氏の研究は、

①『論語義疏(校本)・校勘記』(一九二四年、懷徳堂記念会。後に『武内義雄全集 第一巻 論語篇』所収、一九七八年、角川書店)

②「梁皇侃論語義疏について」(『支那学』三巻二号、一九二三年。『支那学』三巻三号、一九二二年。『支那学』三巻四号、一九二三年。後に「校論語義疏雑識—梁皇侃論語義疏について—」に改題し武内義雄『老子原始』所収、一九二六年、弘文堂書房。『武内義雄全集 第一巻 論語篇』所収)

③「論語皇疏校訂の一資料—国宝論語総略について—」(『日本学士院紀要』六巻二・三合併号、一九四八年。後に「武内義雄全集 第一巻 論語篇」所収)

④「国宝論語総略について」(『関西大学東西学術研究所論叢』一、一九五三年)を参照。

(10) 長澤規矩也「論語義疏伝来に関する疑問」(『漢学会雑誌』一卷一号、一九三三年。後に「長澤規矩也著作集 第七巻 シナ文学概観・蔵書印表」所収、一九八七年、

汲古書院」を参照。

(11) 阿部隆一「金沢文庫蔵鎌倉鈔本周易注疏其他雜抄と老子述義の佚文」(『田山方南先生華甲記念論文集』所収、一九六三年、田山方南先生華甲記念会。後に『阿部隆一遺稿集 第二巻 解題篇二』所収、一九八五年、汲古書院)

(12) 納富常天氏は、本書を『華嚴演義鈔外典鈔』ないしは、『演義鈔外典鈔』と呼称する。納富常天「鎌倉における華嚴教学」(『鎌倉国宝館論集第八』納富常天「鎌倉の教学—金沢文庫資料を中心とした華嚴教学—」所収、一九六四年、鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館)、同「東国仏教における外典の研究と受容—」(『金沢文庫研究』二二六号、一九七五年)を参照。両論文とも後に納富常天『金沢文庫資料の研究』(一九八二年、法蔵館)に所収。

(13) 高橋均氏の研究は、

① 「論語義疏皇侃序札記」(『漢文学会会報』三〇号、一九七一年、東京教育大学漢文学会)

② 「論語義疏学而篇札記」(『鹿児島大学教育学部紀要』二五巻、一九七四年)

③ 「論語義疏為政篇札記(上)」(『東京外国語大学論集』三三三号、一九八三年)

④ 「論語義疏為政篇札記(下)」(『東京外国語大学論集』三四号、一九八四年)

⑤ 「敦煌本論語疏について—「通釈」を中心として—」(『東京外国語大学論集』三六号、一九八六年)

⑥ 「敦煌本論語疏について—経文を中心として—」(『日本中国学会報』三八集、一九八六年)

⑦ 「論語義疏八佾篇札記(上)」(『東京外国語大学論集』三七号、一九八七年)

⑧ 「論語義疏八佾篇札記(中)」(『東京外国語大学論集』三八号、一九八八年)

⑨ 「旧抄本論語義疏について—邢昺の論語正義の竄入を中心として—」(『日本中国学会報』四一集、一九八九年)

⑩ 「論語義疏の二種の校本をめぐって」(『漢文学会会報』四七号 中国文化—研究と教育—一九八九年、大塚漢文学会)

⑪ 「日本における「論語義疏」の受容」(『高校通信東書国語』二九三号、一九八九年)

⑫ 「敦煌本論語疏について—疏を中心として—(上)」(『東京外国語大学論集』三九号、一九八九年)

⑬ 「敦煌本論語疏について—疏を中心として—(中)」(『東京外国語大学論集』四〇号、一九九〇年)

⑭ 「敦煌本論語疏について—疏を中心として—(下)」(『東京外国語大学論集』四一号、一九九〇年)

⑮ 「敦煌本論語疏について(統)—疏を中心として—」(『東京外国語大学論集』四二号、一九九一年)

(16) 「論語義疏の日本伝来について」(『鎌田正博士八十寿記念漢文学論集』所収、一九九一年、大修館書店)

(17) 「敦煌本論語疏について(上)—「提示句」の検討—」(『東京外国語大学論集』四三三号、一九九一年)

(18) 「敦煌本論語疏について(下)—「提示句」の検討—」(『東京外国語大学論集』四四四号、一九九二年)

(19) 「旧抄本論語義疏と敦煌本論語疏」(『日本中国学会報』五二集、二〇〇〇年)

(20) 「論語総略について(一)」(『大妻女子大学紀要—文系—』三三三号、二〇〇一年)

(21) 「論語総略について(二)」(『大妻女子大学紀要—文系—』三五号、二〇〇三年)を参照。

(14) 山口諤司「『論語義疏』の系統に就いて」(『東洋文化』復刊六七号、一九九一年、無窮会)を参照。

(15) 影山輝國氏の研究は、

① 「『論語義疏』校定本及校勘記—皇侃自序—」(『別冊年報』X、二〇〇六年、実践女子大学文芸研究所)

② 「『論語義疏』校定本及校勘記—何晏集解序疏—」(『年報』二六号、二〇〇七年、実践女子大学文芸研究所)

③ 「翻刻『論語義疏』(大槻本)—皇侃自序—」(『実践国文学』七四号、二〇〇八年)

④ 「翻刻『論語義疏』(大槻本)—何晏集解序疏—」(『実践国文学』七五号、二〇〇九年)を参照。

この他、氏の『論語義疏』に関する研究に、「連載 経籍訪古志を読む⑥ 論語義疏旧抄本」(『アジア遊学』一一一 特集 戦争とメディア、そして生活所収、二〇〇八年、勉誠出版)、「評『儒蔵』本『論語義疏』」(『北京大学『儒蔵』編纂と研究中心編『儒家典籍与思想研究』二輯、二〇一〇年、北京大学出版社)、「まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(一)」(『実践国文学』七八号、二〇一〇年)がある。

(16) 影山輝國・洲脇武志・齋藤建太「翻刻『論語義疏』(大槻本)—学而篇・為政篇—」(『年報』二九号、二〇一〇年、実践女子大学文芸研究所)を参照。

(17) 洲脇武志「市島本『論語義疏』跋文について」(『大東文化大学中国学論集』二七号、二〇〇九年)を参照。

(18) 太田晶二郎「日本漢籍史の研究」(『太田晶二郎著作集』第一冊所収、一九九一年、吉川弘文館)を参照。

(19) 拙稿①「『令集解』所引『論語義疏』の性格に関する諸問題—「五常」の条をめぐって—」(『総研大文化科学研究』三三三号、二〇〇七年)

② 「『政事要略』所引『論語義疏』の性格について」(『国立歴史民俗博物館』

館研究報告」一四五集、二〇〇八年)

③『「令義解」「上令義解表」の注釈所引「論語義疏」の性格について』(『日本漢文学研究』五号、二〇一〇年、二松学舎大学日本漢文教育研究プログラム)

なお、本稿では、それぞれ旧稿①・②・③と称する。

(20) 新訂増補国史大系二三巻「律・令義解」(一九六六年、吉川弘文館)によった。

(21) 仁井田陞「唐令拾遺」(一九三三年、東京大学出版会)によった。

(22) 井上光貞「日本律令の成立とその影響」(『日本思想大系3』『律令』所収「解説」一九七六年、岩波書店。後に『井上光貞著作集 第二巻 日本思想史の研究』所収、一九八六年、岩波書店)を参照。

(23) 前掲註(22)を参照。

(24) 『政事要略』所引「文選」注釈を介しての『論語』経文の引用が、『文選李善注』に引く『薛綜注張衡二京賦』と推測される注釈を介しての『論語』経文の引用であることについては、広島大学大学院文学研究科教授 富永一登氏に御示教を賜った。御礼申し上げる。なお、『薛綜注張衡二京賦』の撰者薛綜(生年不詳、二四三)は三国呉の人で、現在、『薛綜注張衡二京賦』は散佚している。

(25) 和田英松『本朝書籍目録考証』(一九三六年、明治書院)「私教類聚 一卷」を参照。なお、「参考」私教類聚(古備真備)(大曾根章介氏校訂)(『日本思想大系8』『古代政治社会思想』所収、一九七九年、岩波書店)に輯佚される。

(26) 利光三津夫「律令及び令制の研究」(一九五九年、明治書院)「第一部 律令の研究 第五章 わが国に舶載された唐律の注釈書 第三節 唐律注釈書逸文の甄別」を参照。

(27) 興膳宏・川合康三「隋書経籍志詳攷」(一九九五年、汲古書院)に「梁有論語義注圖 十二卷 亡」と著録され、「歴代名畫記三古之祕畫珍圖」に「論語圖二卷」が見える。」と注記するが、『政事要略』所引「論語図」との関係は不明である。

(28) 本書は、国立歴史民俗博物館が所蔵する。函架番号H-176-1

(29) 和田英松「政事要略考」(『史学雑誌』二六編一、一九一五年。後に「政事要略百三十巻」に改題し前掲註(25)『本朝書籍目録考証』所収、太田晶二郎「政事要略」補考(『日本歴史』六七号、一九五三年。後に「新訂増補国史大系月報」6所収、一九六四年、吉川弘文館。『太田晶二郎著作集 第二冊所収、一九九一年、吉川弘文館)、虎尾俊哉「政事要略」(坂本太郎・黒板昌夫編『国史大系書目解題』上巻所収、一九七一年、吉川弘文館。後に虎尾俊哉「古代典籍文書論考」所収、一九八二年、吉川弘文館、所功「小野宮年中行事」の成立(『国史学』一二四号、一九八四年。後に所功「平安朝儀式書成立史の研究」所収、一九八五年、国書刊行会)の諸氏の研究により指摘されている。詳しくは、旧稿②を参照。

(30) 小島憲之氏は、『国風暗黒時代の文学(上)』序論としての上代文学―

(一九六八年、塙書房)「第二章 上代人の学問より表現へ 一 学令の検討(2) 論語・孝経」に於いて、「両者(『論語鄭玄注』と何晏『論語集解』―筆者注)が学令に併存するのは、唐令のままを挙げたものに過ぎないのではなかったか。」と述べる。

(31) 小島憲之氏は、前掲註(30)所引書にて、「学令の記載は、少くとも論語に関する限りでは、鄭玄注の伝来及びその直接の利用については甚だ疑はしい。従つて、学令と云ふ規定にみえる表面上の「名」(條文)と、これを実地に利用した官人学生らの「実」(実行)との間隙を考慮しなければならぬ。(中略) 学令に見える「鄭玄注」が、単に鄭玄の注を学習すべきことを意味するならば、前述の如く(『令集解』等に引く『論語鄭玄注』―筆者注、何晏集解にもその引用が到る処にみえるために、それはそれで正しい。しかしそれが成書としての「鄭玄注『論語』」を学ぶべきことを意味するとすれば、やはり学令の記事は文字通りに受け取ることができないのではなからうか。上代に於ける論語学は、何晏集解及び皇侃義疏より始まり、学問としてその訓詁訓詁も開始され、展開する。」と述べ、『論語鄭玄注』が成書としては、利用されていないことを指摘している。

(32) 『世俗諺文』は、寛弘四年(一〇〇七)に藤原頼通のために源為憲(生年不詳、一〇一一)が撰述した金言集である。為憲は、文章生を経て、内記・藏人・式部丞等を歴任した。『世俗諺文』にも『論語疏』が引用されるが、これに合致する文を旧鈔本『論語義疏』に見出すことができない。

『世俗諺文』に引く『論語疏』は、「聞一知十」を説明するために用いられている。以下に引用文を示すと、

論語疏云顔淵曰子淵周時魯人也爲孔子弟子、曰吾與回言終日無違如愚故子貢曰顔回聞一知十云々

とある。内容から、公治長第五の経文「對曰賜也何敢望回、聞一以知十賜也聞一以知十」に対する疏、或いは為政第二の経文「子曰吾與回言終日不違如愚」に対する疏と見られる。為政第二の疏文に「故言終日不違也」が存するものの、『世俗諺文』に引くこの前後の疏文に対応する文を、皇侃『論語義疏』に見出すことができない。ただし、為政第二の孔安国注に「回弟子也姓顔名回字淵魯人也」と、同篇の邢昺疏に「子曰吾與回言終日不違如愚者回弟子顔淵也」とそれぞれある。『世俗諺文』に、邢昺疏に対応する文が存在することから、『世俗諺文』に引く『論語疏』は、邢昺『論語正義』の可能性も考えられるが、『論語正義』が成立したのは北宋の真宗の咸平二年(九九九)であつて、『世俗諺文』が成立したのは寛弘四年(一〇〇七)である。北宋で成立して九年後には日本に舶載され、既に源為憲が目録し得る環境にあつたか疑問が残る。

注目すべきは、本文に於いて後述する、『字槐記抄』の仁平元年(一一五二)九月二四日条に、藤原頼長が劉文仲と名乗る宋商人に「求書目録」を提示し、入

手を依頼した漢籍の中に、邢昺『論語正義』が記載されていることである。この記事は、『世俗諺文』が成立した時期より、一四四年後の蔵書家であり碩学として名高い頼長が『論語正義』を蔵しておらず、欲していることを示している。このことからすれば、『世俗諺文』所引『論語疏』は、皇侃『論語義疏』でも邢昺『論語正義』でもなく、これら以外の『論語疏』、例えば『日本国見在書目録』に著録される六朝梁の褚仲都『論語疏』一〇巻を想定することができると、同定し難い。

『世俗諺文』は、『世俗諺文上巻 観智院本』（天理図書館善本叢書 和書之部 第五七巻）『平安詩文残篇』所収、一九八四年、八木書店）によった。源為憲については、岡田希雄「源為憲伝攷」（『国語と国文学』一九巻一号、一九四二年）、同「源順及同為憲年譜（上）」（『立命館大学論叢』八輯 国語漢文篇 二号、一九四二年）、同「源順及同為憲年譜（下）」（『立命館大学論叢』一二輯 国語漢文篇 三号、一九四三年、大曾根章介「源為憲雜感」（『リラ』八号、一九八〇年、リラの会。後に『大曾根章介 日本漢文学論集』二巻所収、一九九八年、汲古書院）、速水侑「源為憲の世界―勸学会文人貴族たちの軌跡―」（速水侑編『奈良・平安仏教の展開』所収、二〇〇六年、吉川弘文館）、後藤昭雄「源為憲と藤原有国の交渉について」（『日本歴史』七二五号、二〇〇七年）、褚仲都については、高橋均「論語注釈史考（五）―李充、太史叔明、褚仲都、沈峭、熊理―」（『東京外国語大学論集』五六号、一九九八年）のそれぞれを参照。岡田氏論文は、後に黒田彰・湯谷祐三編『岡田希雄集』（『説話文学研究叢書 七巻』、二〇〇四年、クレス出版）に所収。

なお、『世俗諺文』とその引用漢籍の研究に、遠藤光正『管蠡抄・世俗諺文の索引並びに校勘』（一九七八年、現代文化社）、同『類書の伝来と明文抄の研究―軍記物語への影響―』（一九八四年、あさま書房）がある。

- (33) 後藤昭雄『全経大意』と藤原頼長の学問（『成城国文学論集』三三輯、二〇一〇年）を参照。

- (34) 前掲註（22）を参照。

- (35) 空海とその周辺の人物については、川崎庸之「空海の生涯と思想」（『日本思想大系 5』『空海』所収、一九七五年、岩波書店）によった。

- (36) 中算及び『妙法蓮華経釈文』については、吉田金彦「醍醐寺蔵妙法蓮華経釈文解題」（『古辞書音義集成 第四巻』『妙法蓮華経釈文』所収、一九七九年、汲古書院）によった。また、テキストは、『妙法蓮華経釈文』（一九七九年、汲古書院）影印）によった。

- (37) 『妙法蓮華経釈文』巻上に、

（前略）

我戸部藤納言取於朝大公望准於昔維

」（初葉表）

摩詰鬘耆未剃心連早開課予令撰斯文蓋甘知其如此也予謹奉教命漸迴愚慮採諸師之音義集諸家之疏釋刊謬補闕省繁撮要凡今所撰錄者取捷□之單字用基公之音訓其餘列諸宗之疏釋載諸家□（初葉裏）之切韻若一字二義立難辨正則隨□重出斷其疑網勒成三卷名曰法華釋文^{（中略）}重出人間跋驚僧中瘞羊雖望龍象之光塵猶味内外於味道以蠲酌海恐多缺漏時景子年建西月朔五日興福寺釋中筭聊自叙之言尔

妙法蓮華経釋文卷上 釋中筭撰（第二葉表）

とある。

- (38) 『妙法蓮華経釈文』巻下末葉に、

先師中公製作斯文不及清書付愚早逝遺言留耳訓恩在心故今尋書獻上納言（表）

矣弟子真興

」（裏）

と奥書を有する。

- (39) 新訂増補国史大系「公卿補任」第一篇（一九八二年、吉川弘文館）を参照。

- (40) 『經典釈文』は、唐の陸德明が撰した音義書である。その内容は、『周易』・『古文尚書』・『毛詩』・『周礼』・『儀礼』・『礼記』・『春秋左氏伝』・『春秋公羊伝』・『春秋穀梁伝』・『孝経』・『論語』・『老子』・『莊子』・『爾雅』の音義並びに文字の異同を採集し、考証したもので、六朝音を知る資料として貴重である。ただし、興福寺所蔵本は「礼記音義」のみの残巻である。

- (41) 『講周易疏論家義記』は、『周易』の六朝義疏の一つである。その内容は、江南義疏家のうち、論家に属する。三国魏の王弼の玄学を祖述し、三玄の学を主として、仏教学の論理を駆使し、三玄を解釈したものである。狩野直喜「奈良時代抄本講周易疏及經典釈文考」（一九二四年支那学会講演稿。後に狩野直喜『支那学文叢』所収、一九七三年、みすず書房、藤原高男「講周易疏論家義記に於ける易学の性格」（『漢魏文化』創刊号、一九六〇年）、同「江南義疏家の二派に関する一考察」（『日本中国学会報』一二輯、一九六〇年）、河野貴美子「興福寺『經典釈文』及び『講周易疏論家義記』について」（『汲古』五二号 米山寅太郎先生・中嶋敏先生追悼号、二〇〇七年）を参照。

- (42) 善珠の『唯識義灯増明記』には、唐の賈大隱の『老子述義』、同じく唐の成玄英の『莊子疏』が引用されている。河野貴美子「善珠撰述仏典注釈書における老莊関係書の引用」（『アジア遊学』七三、二〇〇五年、勉誠出版）を参照。

- (43) 具平親王とその周辺の人物については、大曾根章介「具平親王考」(『国語と国文学』三五卷一二号、一九五八年)、同「具平親王の生涯(上)」(紫式部学会編『源氏物語とその周辺の文学 研究と資料』古代文学論叢一〇輯 研究篇所収、一九八六年)、同「具平親王の生涯(下)」(『和漢比較文学叢書』12)『源氏物語と漢文学』所収、一九九三年、汲古書院。なお、当該註所引の大曾根氏論文全て、後に前掲註(32)『大曾根章介 日本漢文学論集』二卷所収、後藤昭雄「一条詩壇と『本朝麗藻』」(『国語と国文学』四六卷八号、一九六九年。後に後藤昭雄「平安朝漢文学論考」所収、一九八一年、桜楓社)、平林盛得「中書大王と慶滋保胤―日本往生極楽記の補訂者」(『説話文学研究』一六号、一九八一年。後に平林盛得「慶滋保胤と浄土思想」所収、二〇〇一年、吉川弘文館)、川口久雄「三訂平安朝日本漢文学史の研究 中篇―王朝文学の中興―」(一九八二年、明治書院)「第一章 寛弘期漢文学とその特質(その一) 第三節 具平親王の文学と弘決外典鈔」のそれぞれによった。また、具平親王の漢籍講究とその漢学に関しては、河野貴美子「具平親王『弘決外典鈔』の方法」(吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』所収、二〇〇八年、勉誠出版)を参照。
- (44) 慶滋保胤(生年不詳―一〇〇二)は、陰陽家賀茂忠行の子息。文章博士から内記・弁官・式部大輔を歴任した菅原文時に師事。天延二年(九七四)に勧学会を結成した。寛和二年(九八六)に出家し叡山横川に住し、増賀上人に止観、恵心僧都源信に念仏を学んだ。浄土信仰に精通し、『日本往生極楽記』を撰述した。漢詩は『本朝文粹』・『和漢朗詠集』に収載される。『大日本史料』二編之四「長保四年十二月九日」条、平林盛得「撰開期における浄土思想の一考察―慶滋保胤について」(『書陵部紀要』六号、一九五六年。後に『慶滋保胤と浄土思想』所収)、同「慶滋保胤の死―三河入道寂照の入宋に関連して」(『日本仏教』二二号、一九六五年。後に『慶滋保胤と浄土思想』所収)、前掲註(43)平林氏論文、増田繁夫「慶滋保胤伝攷」(『国語国文』三三卷六号、一九六四年)、後藤昭雄「慶滋保胤」寂心出家した文人(二)「(歴史文化ライブラリー」133)後藤昭雄「天台仏教と平安朝文人」所収、二〇〇二年、吉川弘文館)を参照。なお、その他、慶滋保胤については、平林盛得「慶滋保胤と浄土思想」所収の論文に詳しい。
- (45) 橘正通(生歿年不詳)は、大舍人頭橘実利の子息。宮内少丞等を務めた。大学寮に学び源順に師事した。『本朝文粹』等に漢詩が収載される。『大日本史料』一編之一四「天禄三年八月十八日」条、堀内秀晃「橘正通伝記考」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』一号、一九七一年)を参照。
- (46) ある僧とは、前掲註(12)納富氏論文「東国仏教における外典の研究と受容―一―」によると、増賀上人と推定する。
- (47) 前掲註(43)後藤氏論文を参照。書斎桃花閣の名は、高階積善等が編纂した『本朝麗藻』巻下 懷旧部の藤原為時の詩に見える。なお、『本朝麗藻』は大曾根章介・佐伯雅子編「校本 本朝麗藻 附索引」(一九九二年、汲古書院)によった。
- (48) 尾崎康「弘決外典鈔引書考並索引」(『斯道文庫論集』三輯、一九六四年)、前掲註(43)河野氏論文を参照。
- (49) 藤原行成(九七二―一〇二七)の日記である『権記』に、以下の二箇条の具平親王と漢籍に関する記事が認められる。『増補史料大成』(一九七五年、臨川書店)所収本では長保三年(一〇〇二)三月廿八日条、「史料纂集」(一九八七年、続群書類従完成会)所収本では長保三年三月二日条のそれぞれに行成が具平親王に『莊子』一部・『唐曆』二帙を返却した記事、寛弘六年(一〇〇九)四月七日条に行成が具平親王に『草玉篇』三巻を返却した記事が認められる。『増補史料大成』と『史料纂集』が同一記事を異なる月日に懸けているのは、『史料纂集』の底本である宮内庁書陵部所蔵伏見宮本に缺巻があり、更にそれを補う諸本の長保三年三月の巻に日次が前後するところがあること(『増補史料大成』所収本 解題「矢野太郎氏執筆」)から、『増補史料大成』(底本は伏見宮家従浦野直輝氏が伏見宮本を転写したものを更に井上頼因氏が転写させたもの)が、錯簡を補正したことに起因する異同である。伏見宮本は、国立歴史民俗博物館所蔵「宮内庁書陵部蔵伏見宮家本行成卿記」(紙焼き写真)を用いた。なお、行成の漢学を検討したものに、藤原克己「権記を中心に」(山中裕編『古記録と日記』下巻所収、一九九三年、思文閣出版)があり、長保三年三月二日条について言及している。
- (50) 和田英松「惟宗氏と律令」(『国史説苑』所収、一九三九年、明治書院)を参照。
- (51) 『修文殿御覽』ないしはその藍本である『華林遍略』の可能性が指摘されているバリ国立図書館所蔵敦煌佚名類書(整理番号P.2626)、『北堂書鈔』・『藝文類聚』・『初学記』・『太平御覽』、及び日本に於ける類書の淵源である『秘府略』の各書について、『論語義疏』の引用文辞の有無を調査した結果、管見の及ぶところ、見出し得なかった。ただ、敦煌佚名類書と『秘府略』は、ともに極一部が残存するに過ぎないため、『論語義疏』の引用条数を始めとする両書の全貌を窺い知ることとは容易ではないが、『敦煌佚名類書』以下の各類書に『論語義疏』の引用文辞が認められないこと、『政事要略』・『小野宮年中行事裏書』の両書に引用される『論語義疏』には共通の脱字・脱文・節略が認められ、両書は親近性が窺われること、『三』前掲註(29)の和田氏を始めとする諸氏により、『小野宮年中行事』の編纂に際し、『政事要略』を参考にしていたこと、及び藤原実資からの依頼で『政事要略』の編纂が企てられた可能性が指摘されていること、『四』惟宗直本により編纂された『令集解』・『政事要略』・『小野宮年中行事裏書』の各書に引用される『論語義疏』の性格が符合すること、の四点から鑑みて、『令集解』・『政事要略』・『小野宮年中行事裏書』の各書に引用される『論語義疏』は、類書等からの間接引用ではなく、惟宗家に相伝していた『論語義疏』を藍本としたとする仮説を提出した。詳しくは、旧稿②を参照。

- (52) 前掲註(51)の《二》を参照。
- (53) 濟暹については、『大日本史料』三編之一六「永久三年十一月二十六日」条、広小路亨「濟暹の研究―伝記、学風、信仰―」(『仏教研究』四卷六号、一九四一年)、大山公淳「仁和寺濟暹僧都の教学―高野山教学展開の一として―」(『印度学仏教学研究』一五卷二号、一九六六年)、同「仁和寺濟暹僧都の教学―高野山教学展開の一として―」(『密教学』五号、一九六八年)によった。
- (54) 『台記』一(増補史料大成)一九六五年、臨川書店を用いた。
- (55) 藤原頼長とその周辺の人物については、橋本義彦「藤原頼長」(『人物叢書』120)一九六四年、吉川弘文館によった。
- (56) 頼長の学問と蔵書家としての側面については、小川剛生「中世の書物と学問」(『日本史リブレット』78)(二〇〇九年、山川出版社)を参照。なお、頼長の漢籍講究について概観したものに、謝泰「頼長と漢学―『台記』より見る―」(『鶴山論叢』四号、二〇〇四年)がある。
- (57) 『台記別記字槐記抄』(増補史料大成)一九六五年、臨川書店を用いた。
- (58) 林泰輔編『論語年譜』(一九一六年、大倉書店)「近衛天皇仁平元・南宋高宗紹興二一・西紀一一五一」条に於いて、氏は「全解は宋の陳祥道、正義は邢昺の作にして、述義は隋の劉炫の述義なるべし。その他は考ふる所なし。或は文字の誤謬あらんか」と述べている。更に、大庭脩・王勇編『典籍』(『日中文化交流史叢書』9)一九九六年、大修館書店)「第一章 日本における中国典籍の伝播と影響 四唐商献納品と中国典籍」(大庭脩氏執筆)にて、「求書目録」中の書名の省略を補って、掲げている。適宜、両書も参考にした。
- (59) 『論語述義』は、北宋の邢昺「論語正義」の原資料となったもので、現在は、散佚している。野間文史「論語正義源流私攷」(『広島大学文学部紀要』五一巻特輯号、一九九一年。後に「邢昺『論語正義』について」に改題し野間文史「五経正義の研究―その成立と展開」所収、一九九八年、研文出版)を参照。
- (60) 『論語正義』は、唐の太宗の貞観二二年(六三八)に孔穎達等が勅を奉じて五経の疏として「五経正義」を撰したが、『論語』等の疏は撰せられず、北宋の咸平二二年(九九九)に邢昺が勅を奉じて、皇侃の『論語義疏』を原資料として、燕雑を刪略して撰した。高田眞治「論語の文献・註釈書」(一九三七年、春陽堂書店、武内義雄『論語の研究』(一九三九年、岩波書店。後に前掲註(9)「武内義雄全集第一巻論語篇」所収)を参照。また、前掲註(59)の野間氏論文によると、『論語述義』も原資料としたことと、更に、『四庫提要』が「論語正義」を「漢学」の終着駅であると評するのは当たっているが、「宋学」の出発点であると見なすことには、その具体例の指摘が無いだけに、大いに疑問を抱かざるを得ない。(中略)これまで「義疏」の学は「五経正義」をもって終焉したと考えていたのであるが、これが唐末五代を経て北宋の初めにまで綿々と継承されていたとは、筆者にとっては発見であった。邢昺『論語正義』こそが六朝時代の「義疏」の学の終焉であったのだ。」と述べている。
- (61) 『論語全解』の撰者陳祥道は、北宋の王安石(一〇二一―一〇八六)の門人で、三礼に長じた。『論語全解』の他、『礼書』一五〇巻を撰した。前掲註(60)『論語の文献・註釈書』、原田種成編『訓点本四庫提要経部六四書・楽類』(一九八三年、汲古書院)、『足本宋元学案』(一九七一年、広文書局)を参照。
- (62) 棚橋光男「転形期の王権―後白河論序説」(編者代表 永原慶二「講座・前近代の天皇1 天皇権力の構造と展開その1」所収、一九九二年、青木書店。後に「後白河論序説」に改題し棚橋光男「後白河法皇」所収、一九九五年、講談社)は、『宇槐記抄』の「求書目録」に著録される漢籍を、頼長の学風を知る一例とする。氏は、その学風について、訓詁学ではなく、義理の解明に主眼があつて、漢唐訓詁学の克服を企図し、宋学に肉薄していることを主張する。ただし、「求書目録」に著録される『論語』注釈書から見るに、漢唐訓詁学の書と宋学の書は、ともに著録されており、漢唐訓詁学の克服を企図しているようにには察せられない。
- (63) 平基親については、山崎誠「平基親撰『往生要集外典鈔』考」(山崎誠「中世学問史の基底と展開」所収、一九九三年、和泉書院)によった。
- (64) 『往生要集外典鈔』は、真福寺宝生院真福寺文庫所蔵原本を用いた。
- (65) 『玉葉』は、宮内庁書陵部編『九条家本玉葉五』(『図書叢刊』一九九八年、明治書院)によった。
- (66) 日記の家としての高棟流については、松蘭斎「日記の家―中世国家の記録組織―」(一九九七年、吉川弘文館)「第一章「日記の家」の概念化 第二章 貴族社会と家記―「日記の家」間接史料の検討― 第三章 家記の構造」によった。
- (67) 新訂増補国史大系「公卿補任」第一篇(一九八二年、吉川弘文館)を参照。
- (68) 『三教指帰注集』は佐藤義寛「大谷大学図書館蔵『三教指帰注集』の研究」(一九九二年、大谷大学)、『三教指帰注』は太田次男「釈信教とその著作について―附・新楽府略意二種の翻印―」(『斯道文庫論集』五輯、一九六七年。後に太田次男「旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究」下巻、一九九七年、勉誠社)、『和漢朗詠註略抄』は黒田彰「室町以前(朗詠注)書誌稿」(『中世文学』二八、一九二八年。後に加筆して黒田彰「中世説話の文学史的環境」所収、一九八七年、和泉書院。改題して『和漢朗詠註抄・註略抄伝本解題』(伊藤正義・黒田彰・三木博雅編著『和漢朗詠集古注釈集成』一巻所収、一九九七年、大学堂書店)、『山崎誠「身延文庫蔵和漢朗詠註略抄影印並びに翻刻」(鎌倉時代語研究)五輯、一九八二年、武蔵野書院。後に加筆改題して『和漢朗詠註抄』攷」(『国語と国文学』五九巻三号、一九八二年。前掲註(63)「中世学問史の基底と展開」所収)、『全経大意』は後藤昭雄「『全経大意』について」(『科学研究成果報告書課題番号一九三二〇〇三七 研究代表者後藤昭雄「真言密教寺院に伝わる典籍の

学際的調査・研究―金剛寺本を中心に―」所収、二〇〇九年）及び前掲註（33）の同氏論文のそれぞれを参照。

（69）藤原佐世については、『大日本史料』一編之二「寛平九年是秋」条、後藤昭雄「藤原佐世―菅原道真の周囲―」（『古代文化』三三巻五号、一九七九年）、同「三善清行と藤原佐世」（前掲註（44）『天台仏教と平安朝文人』所収）を参照。

（70）『日本国見在書目録』を、冷然院焼失後、残存した漢籍の目録であるとする説には、島田重礼「目録ノ書ト史学トノ関係」（『史学雑誌』四編三九号、一八九三年）、内藤虎次郎「平安朝時代の漢文学」（内藤虎次郎『日本文化史研究』所収、一九四六年、弘文堂書房。後に『内藤湖南全集』第九巻所収、一九六九年、筑摩書房）、狩野直喜「日本国見在書目録に就いて」（『藝文』一卷一号、一九一〇年。後に前掲註（41）『支那学文叢』所収）、山田孝雄「帝室博物館蔵日本国見在書目録解説」（『日本国見在書目録』所収、一九二五年、古典保存会事務所。後に『日本国見在書目録註解稿』に改題し（『日本古典全集第二回・狩谷校齋全集七巻』『日本国見在書目録註解稿』所収、一九二八年、日本古典全集刊行会。更に『日本国見在書目録』に改題し山田孝雄「典籍説稿」所収、一九五四年、西東書房）、和田英松「日本見在書目録に就て」（『史学雑誌』四編九号、一九三〇年）、川口久雄「三訂平安朝日本漢文学史の研究 上篇―王朝漢文学の形成―」（一九七五年、明治書院）「第六章 唐・渤海との交通と日本見在書目録 第四節 日本見在書目録の編修とその特色」、小長谷恵吉「日本国見在書目録解説稿附 同書目録・索引」（一九七六年、小宮山出版）の諸氏がいる。

（71）貞観一七年以前説に小長谷恵吉氏、寛平年間説に島田重礼・狩野直喜・山田孝雄・川口久雄の四氏がいる。前掲註（70）を参照。

（72）仁和四・五年から寛平元・二年頃に存在した漢籍の目録とする説には、太田晶二郎「日本漢籍史札記（一）日本国見在書目録編纂の精神」（前掲註（18）『太田晶二郎著作集』第一冊所収）がある。

（73）『日本国見在書目録』は、前掲註（70）『日本国見在書目録』（後に『日本国見在書目録 宮内庁書陵部所蔵室生寺本』（一九九六年、名著刊行会）に書名変更）によった。また、矢野玄亮「日本国見在書目録―集証と研究―」（一九八四年、汲古書院）も適宜、参考にした。

（74）興膳宏・川合康三『隋書経籍志詳攷』（一九九五年、汲古書院）を参照。

〔付記〕

本稿は、筆者が平成二二年度に総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻博士後期課程に提出した博士論文「日本古代に於ける『論語義疏』受容の歴史的研究」の序章並びに第五章をもとに加筆修正したものである。

〔追記〕

本稿脱稿後、住吉朋彦「藤原頼長の学問と蔵書」（佐藤道生編『名だたる蔵書家、隠れた蔵書家』所収、二〇一〇年十一月、慶應義塾大学出版会）に接した。氏は、藤原頼長の学問と蔵書、周辺の人的交流について解明した。特に、『春秋左氏伝』を一例に頼長とその周辺の学問の実態について検討した。更に、「文倉」と称する頼長の書庫と蔵書の傾向、春秋類から見た頼長の漢籍蒐集の実態、頼長周辺の版本受容、等について検討した。結論として「頼長の活躍した平安後期、学者の間に宋版本が浸透を始め、古写本への校合という形で、実際の参考に供されつつあった。このことは、中世を通じて和漢の版本が次第に普及し、出版の全盛期である近世への道をたどった、後の世の事情を考えると、日本の学術界に、版本の曙光が差し初めた時期の出来事として、捉え直すことができる。」と述べ、平安時代後期以降の版本普及過程に於ける頼長の版本受容の位置を指摘した。前掲註（55）橋本義彦「藤原頼長」とともに、藤原頼長の学問・蔵書・人物交流に関する研究を行う上で、まず参照すべき論考と言える。

（国立歴史民俗博物館外来研究員）
（二〇一〇年八月二四日受付、二〇一〇年十一月三〇日審査終了）

The History of Acceptance “Lunyu-yishu” in Ancient Japan

TAKADA Sohei

Regarding the acceptance of the commentaries of the “Analects of Confucius” in ancient Japan, Japanese historical studies have discussed “Lunyu-jijie”, but have paid little attention to “Lunyu-yishu”. This article examines various aspects of the acceptance of “Lunyu-yishu” in ancient Japan and its historical development by the following methods : investigation of the nature of ancient Japanese books quoting “Lunyu-yishu”, the time of their formation, and human relationships around the editors; search of “Lunyu-yishu” in the ancient inventory of books; and search of the evidence of the acceptance of “Lunyu-yishu” in ancient historical records.

“Lunyu-yishu” was introduced to Japan in 738 (Tenpyo 10), and was accepted by Imperial princes, court nobles, middlegrade and lowgrade nobles, officials, priests of Buddhism, etc., and permeated among them through the Nara period and the Heian period.

From the 8th to 9th century, “Lunyu-yishu” was used by legal officials, who were the editors of “Koki”, “Shaku”, and “San”, to interpret legal codes. From the end of the 10th century to the beginning of the 11th century, it was used by Prince Tomohira, who was an imperial descendant, to investigate non-Buddhist scriptures quoted in “Shikan-bugyoden-guketsu”. In the first half of the 11th century, it was used by Koremune-no-Tadasuke, who was a teacher in laws and ethics, to clarify the precedents of court ceremonies and official duties, and by Fujiwara-no-Sanesuke, who was the Minister of the Right, to understand the ancient practices and usages. Among the priests of Buddhism, Kukai used “Lunyu-yishu” in the 9th century, and Chuzan of the Kohfuku-ji Temple of the Dharma-character school in the 10th century. In the last half of the 11th century, “Lunyu-yishu” was used in various Japanese classical books including Buddhist Scriptures. In the first half of the 12th century, Fujiwara-no-Yorinaga, who was the Minister of the Left, lectured on many Chinese classical books, one of which was “Lunyu-yishu”.

Writers and scholars with literary talent, who were also court nobles, middlegrade and lowgrade nobles, and officials, gathered especially around Prince Tomohira and Fujiwara-no-Yorinaga. Both of them played a key role in lectures and discussions on Chinese writings and literature in respective times. One of the books treated in such activities was “Lunyu-yishu”.

Keywords : “Lunyu-yishu”, “Lunyu-yishu” quoted in Japanese classical books, Prince Tomohira, Fujiwara-no-Yorinaga, Lectures and discussions on Chinese writings and literature